安源寺遺跡第三次発掘調査報告書

安源寺

II

1979年3月

長野県中野市教育委員会

序　　言

古代遺跡は、郷土の歴史を解明する資料として重要でありますが、近年、生活基盤・生産基盤整備事業が行われ、これらが壊滅する恐れがあり、文化財保護の立場から大きな問題として取り上げられるようになりました。今回の発掘調査は、昭和51年秋、宗教法人平和教会が、修業殿を安源寺宮裏の畑地に建設することになり、この地籍は、安源寺遺跡内にあるので、事前に緊急発掘調査を実施し、記録保存を図ることにしました。

調査顧問を県文化財保護審議委員金井喜久一郎先生に、調査団長を県文化財保護指導委員金井汲次先生にお願いし、調査員に田川幸生・関幸一・檀原長則・金井文司・小野沢捷の各先生、調査補助員として明治大学学生小池久男氏ほか地域考古学同好の諸氏、教育委員会職員等多くの皆さん方のご協力を得て、昭和51年11月11日から12月25日まで発掘調査を実施しました。

日の短い時期であり、また、降雨降雪等悪条件のもとでありましたが、顧問・調査団長・先生方の綿密な計画と適切なご指導のもと、調査員の皆様方の献身的なご努力により、次に掲げるような立派な成果をおさめていただきました。

弥生後期住居址4戸・半地下式平窯1基・土師住居址3戸・鍛冶屋址1戸・土坑墓4基その他数多くの貴重な資料が出土しました。

これらの資料は、この期の文化相の有力な手がかりとなり、また、古代の集落と産業構造を究明するうえに、極めて重要な資料であり、よろこびに堪えないところであります。

以上、今期の調査結果は、いくつかの新しい知見をもたらすものであって、これが学界に寄与するところが大きいと信ずるのであります。

この緊急発掘調査に従事してくださった多くの方々のご努力に対し心から感謝を申しあげるとともに、団長金井汲次先生のご努力により、このような立派な報告書が出来ましたことは、誠に有難く、よろこびに堪えないところであります。

この報告書が、郷土の歴史解明に役立ち活用されることを心から念じ序といたします。

昭和54年3月

中野市教育委員会

教育長　山　田　芳二郎

目　次

序　言
Ⅰ　はじめに …… 5
Ⅱ　遺跡の立地と環境 …… 8
Ⅲ　遺構・遺物 …… 11
1　旧石器時代の遺物 …… 11
2　縄文時代の遺物 …… 11
3　弥生時代の遺構・遺物 …… 12
(1)　第1号住居址 …… 12
(2)　第2号住居址 …… 15
(3)　第3号住居址 …… 17
(4)　第4号住居址 …… 20
(5)　第1号土坑墓 …… 21
(6)　第2・3号土坑墓 …… 23
(7)　甕　棺 …… 23
(8)　K 16・L 16出土遺物 …… 24
4　古代の遺構・遺物 …… 25
(1)　第1号住居址 …… 25
(2)　第2号住居址 …… 26
(3)　第3号住居址（鍛冶址） …… 27
(4)　第4号住居址 …… 32
(5)　土師窯址 …… 33
(6)　土坑墓 …… 35
(7)　H 12・K 12付近の遺物 …… 35
(8)　柱穴遺構 …… 35
(9)　窯南出土の遺物 …… 36
Ⅳ　結　び …… 37

図　版　目　次

第 1 図　遺構全図 …… 5
第 2 図　調査団メンバー …… 6
第 3 図　遺跡全景 …… 7
第 4 図　遺跡付近図 …… 8
第 5 図　旧石器実測図 …… 11
第 6 図　土偶の出土状況 …… 11
第 7 図　縄文遺物実測図 …… 12
第 8 図　鉄器・土製品実測図 …… 12
第 9 図　第1号住居址土器実測図 …… 13
第10図　第1号住居址実測図 …… 14
第11図　石器・土製品実測図 …… 15
第12図　第2号住居址実測図 …… 15
第13図　第2号住居址土器実測図 …… 16
第14図　第3号住居址実測図 …… 17
第15図　第3号住居址写真 …… 18
第16図　鉄器・石器実測図 …… 18
第17図　第3号住居址土器実測図 …… 19
第18図　第4号住居址土器実測図 …… 20
第19図　第1号土坑墓実測図 …… 21
第20図　第1号土坑墓写真 …… 21
第21図　第1号土坑墓土器実測図 …… 22
第22図　第2・3土坑墓実測図 …… 23
第23図　甕棺の出土状況 …… 23
第24図　甕棺実測図 …… 24
第25図　一志・宮本・金井先生の見学 …… 24
第26図　K 16・L 16付近の遺物実測図 …… 25
第27図　第1号住居址実測図 …… 26
第28図　第2号住居址実測図 …… 26
第29図　第2号住居址写真 …… 27
第30図　第3号住居址実測図 …… 27
第31図　竈付近出土遺物実測図 …… 28
第32図　住居址内出土遺物実測図 …… 29

第33図　鍛冶関係遺物実測図 …… 30
第34図　Aピット内出土遺物実測図 …… 31
第35図　第4号住居址実測図 …… 32
第36図　第4号住居址土器実測図 …… 32
第37図　窯址実測図 …… 33
第38図　窯址・灰原出土遺物実測図 …… 34
第39図　窯址写真 …… 34
第40図　土坑墓実測図 …… 35
第41図　H 12・K 12付近の遺物実測図 …… 35
第42図　柱穴・焼土群実測図 …… 35
第43図　窯南出土・表採等の遺物実測図 …… 36
第44図　安源寺遺跡年表 …… 37

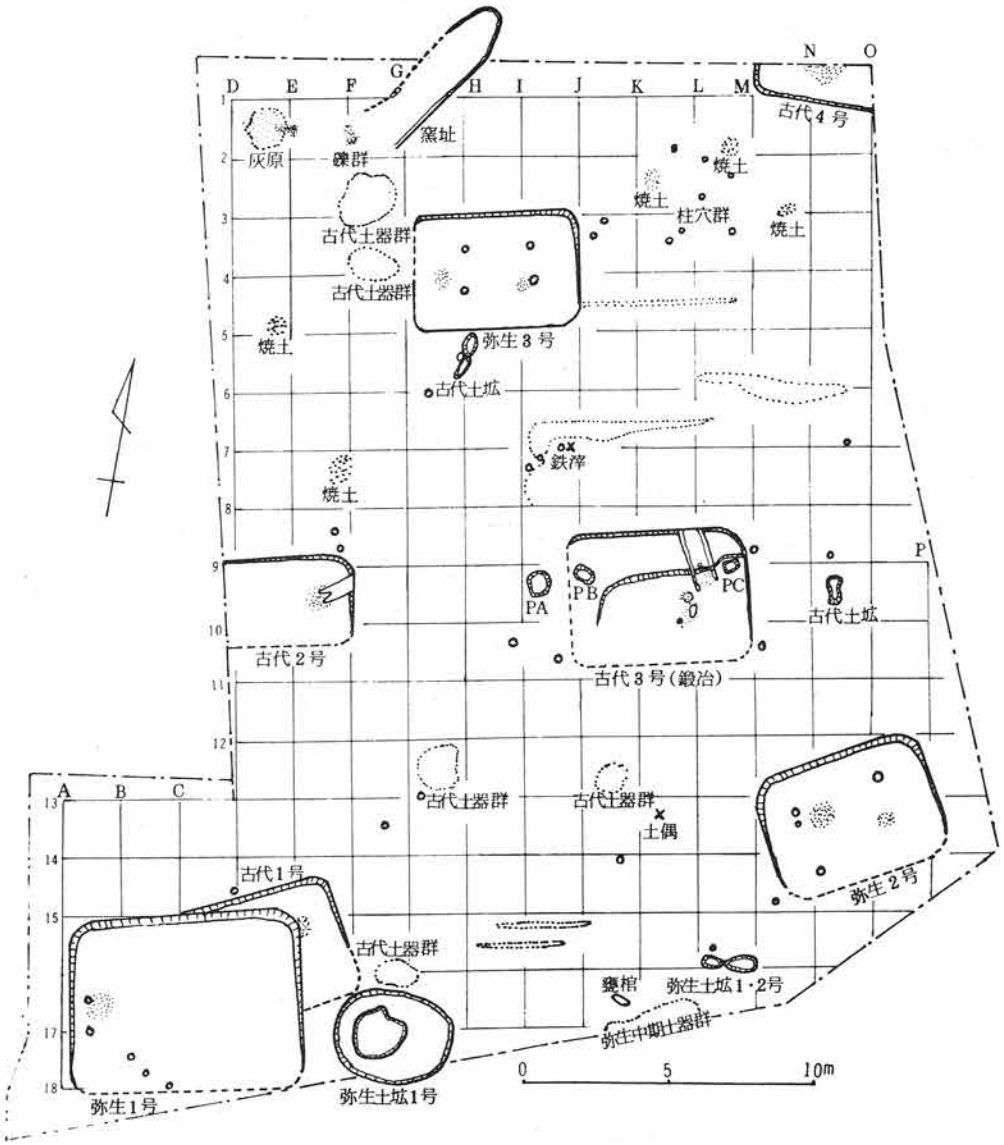
挿　図　目　次

図版第1　安源寺遺跡周辺（航空写真） …… 39
図版第2　弥生1号土坑墓発掘状況 …… 39
図版第3　弥生1号住居址発掘状況 …… 40
図版第4　弥生1号住居址 …… 40
図版第5　弥生3号住居址 …… 41
図版第6　甕棺出土状況 …… 41
図版第7　A区遺構 …… 42
図版第8　古代2号住居址 …… 42
図版第9　鍛冶遺構（古代3号住居址） …… 43
図版第10　遺物出土状況（弥生1号住居址） …… 44
図版第11　鍛冶屋　木炭（左）　鉄滓（右） …… 44

I　はじめに

宗教法人平和教会（中野教会長 一　山栄一氏）は安源寺遺跡の一部に修行殿の建設を計画したため、事前に記録保存のための発掘調査を行った。以下は、その記録の概要をまとめたものである。

中野市教育委員会は昭和51年春以降、平和教会の責任者と協議をかさね、10月上旬に当該地の緊急分布調査を行って、遺構・遺物の所在を確認し、諸般の手続きをとった。



第1図　遺構全図

発掘調査は南へ傾斜地の休耕畑で、次表のごとき場所である。

第2図　調査団メンバー

第1表　発掘調査地表

地　　字	地　番	地　目	地　積	備　　考
大字安源寺字宮裏	584－1	畑	484 m²	2筆合計1,028 m²　地主　山崎正治郎氏
〃	585－1	〃	544 m²	

発掘調査の体制は次のごとく編成した。

調査責任者	中野市教育委員会教育長	山田芳二郎
調査顧問	長野県文化財保護審議委員	金井喜久一郎
調査団長	長野県文化財保護指導委員・日本考古学協会員	金井汲次
調査員	中野市立長丘小学校教諭・日本考古学協会員	田川幸生
	長野県立須坂園芸高校教諭・日本考古学協会員	関　孝一
	中野市更科・長野県考古学会員	檀原長則
	小布施町教育委員会・長野県考古学会員	金井文司
	中野市農業委員会・長野県考古学協会員	小野沢　捷
調査補助員	明治大学学生	小池久男
	中野市七瀬・高井地方史研究会編集副部長	長針　功
	中野市七瀬・高井地方史研究会員	池田実男
	中野市七瀬・高井地方史研究会員	畔上克臣
事務局	中野市教育委員会教育次長	古川光夫
	〃　社会教育係長	小池章夫
	〃　社会教育係	黒崎利男

発掘調査事前準備は11月11・12日両日にわたり、草刈り雑木伐採、区のグリット設定211、天幕張り等を行い、13日に鍬入式を挙行して本格的な発掘を開始した。晩秋の北信濃は短日の上に、朝は霜が白く、時として雪の舞う日もあって作業は難渋した。また「Ⅲ」にのべるように予想外の遺構

第3図　遺跡遠景

遺物が多く文化庁へ届けた12月10日までには終了することができなかったため、15日間の期間延長を願い出て、12月25日にようやく完了した次第である。

この間、県文化財保護審議会長一志茂樹先生、同審議員宮本馨太郎先生がご視察下され高い立場からご指導わ賜わり、また県教育委員会文化課指導主事樋口舜一・丸山敞一郎先生の現地指導を賜わった。さらに桐原健・高橋桂・松沢芳宏先生はじめ多くの研究者の現場指導と助言をいただいた点について、ともども厚く感謝申しあげる次第である。

発掘作業は晩秋から初冬にかけての寒い折にもかかわらず多勢のご参加をいただいた。次に御芳名をかかげ心からお礼を申しあげたい。　（順不同・敬称略）

小林　尊・佐藤嘉市・高野定雄・小林俊幸・山田みどり
神田禎治・小林行保・中丸政範・若林繁作・若林菊之助
藤沢栄治・小林東助・高見沢市郎・割田市太郎・山崎義郎
田中隆夫・市川洋子・神田一二・山崎岩男・宮島範重
小野定雄・荒井よしゑ・金井正彦・小池一也・堀内義博
西原　正・有賀義一・有賀充次・丸山和司・春原武志
春原則治・町田豊至・高木　学・春原一成・阿藤峰男
近藤千代美・町田和江・丸山　修・佐藤茂治・下田由人
鈴木茂子・小嶋安子・宮島信男・篠原三男・小林実治
涌井和彦・荒井ひろ・武田文江・春原ひろ子・小島トミ
川口愛子・竹内ひさ・森川ゆき子・渡辺正子・阿藤今朝美
増田直隆・依田貞明・関　章・深見晴彦・小池久志
中沢宮登・佐藤式婦・田中正枝・永峰義久・斉藤かおり
町田博文・小池和幸・飯島　正・丸山けさみ・永井明美
永井一徳・永井正一・小林文雄・小林いさお・黒岩よしひこ
内藤まゆみ・湯出川美佐子・春原紀行・鈴木一男・小沢けさ江
阿部　淳・金子順一・神田智仁・小林清孝・長針ゆかり
田川園子・松島みどり・関　武・春原雄司・酒井　覚

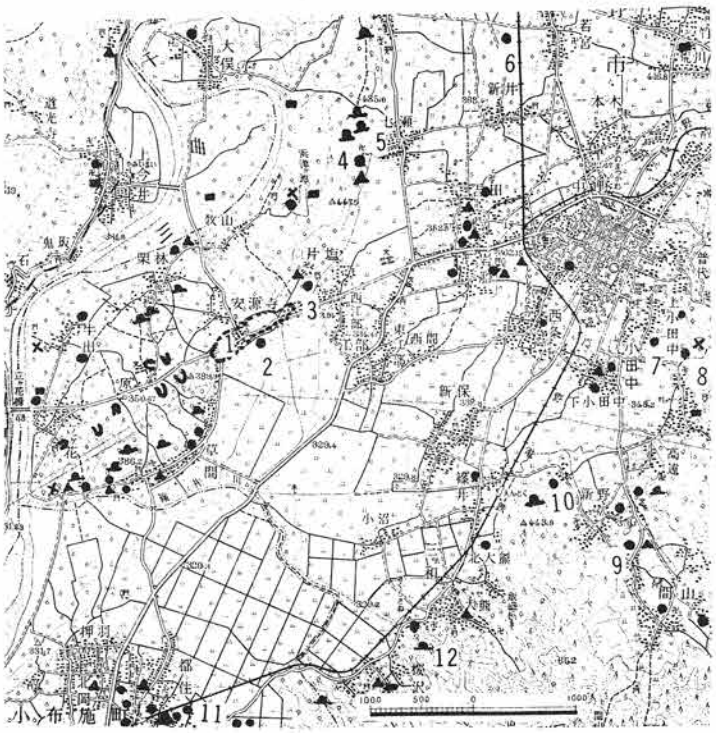
II　遺跡の立地と環境

千曲川は善光寺平に入ると、いよいよ母なる川の様相を呈し流域は肥沃な穀倉地帯となっている。蛇行北流した川は立ケ花地籍から低い峡谷に入り、流路は一定するが、古牧地籍からは乱流をはじめ木島・常盤平の穀倉地が展ける。

善光寺平の北限に位する中野平は通称「延徳田圃」とも呼ばれ、この田圃を囲繞して各時代各種の複合遺跡が点在している。第4図はその分布を示したものである。

延徳田圃をめぐって、東には夜間瀬川が志賀高原から土砂礫を運搬堆積して作った広大で模式的な中野扇状地があり、南は三沢山～山田峠～雁田山の一連の山山の麓に鋸歯状に発達した小扇地、西南には松川によって形成された小布施扇地、西は千曲川の自然堤防上に築造された大堤防がある。延徳田圃はそれ等にとり囲まれた後背低湿地で、大堤防のできる以前は沖積氾濫原で冠水による被害の多かった所であった。

口碑によれば、往古は一大溜水湖で、遠洞湖と呼ばれたと伝えられ、周辺の遺跡からは漁撈に使用したと思われる弥生時代から古代にかけての土製管状土錘の出土例が多く、また舟つなぎ石等の湖にちなんだ伝説が数多く残っている。おそらく千曲川・夜間瀬川・松川の氾濫が頻繁で沼沢地状を呈していたものであろう。



第4図　遺跡付近図

1 安源寺　2. 大欅出土地　3 片塩　4 七瀬双子塚古墳　5 前山古墳　6 新井大ロフ　7 小田中東田　8 姥懐　9 間山石動下　10 金鎧山古墳　11 中子塚境　12 蟹沢古墳

（× 旧石器遺跡　▲ 弥生遺跡　● 土師遺跡　▲ 古墳　∩ 窯跡）

第2表　周辺遺跡表

番号	遺　跡	地　形	遺　物
417	七　瀬	山　腹	(分)太形蛤刃石斧・器台　(土)前期坩（3ケ）他破片
422	安　源　寺 宮裏・峰 立道・石 原・日向 八幡社	山　陵	(縄)前期破片・勝坂式(多)・加曽利E式、石鏃・打石斧・磨石斧・石匙・石槍・凹石・磨石・石皿・敲石・玦状耳飾　(分)栗林式(少)・箱清水式高坏器台、土錘、磨石鏃・打石鏃・太形蛤刃石斧・扁平片刃石斧・石庖丁・凹石・細形管玉　(土)前期小形坩・後期糸切皿　(須)後期、ガラス玉、窯滓
423	栗　林 北原・松 原・野地	山　陵	(分)荒山式・栗林式・百瀬式　紡錘車（土製）、打石鏃・磨石鏃・太形蛤刃石斧・扁平片刃石斧・小形磨石斧・石鋸・石庖丁・石槍・細形管玉・勾玉・ガラス小玉・滑石模造品（住居址あり）
426	立ケ花(表)	低湿地	(土)前期―無文高坏・蓋・その他破片　後期―糸切皿・壷
427	立　ケ　花 （島軒割）	〃	(土)前期―高坏・碗　後期―糸切皿　(須)破片
430	草間（土橋）	〃	(分)箱清水式(多)　(土)前期―高坏・坩・坏・甕・その他破片(多)
431	〃　（中組）	台　地	(分)中期壷、太形蛤刃石斧
432	〃（高屋敷）	〃	(分)後期高坏、凹石

第3表　周辺窯址群表

番号	窯　址　群	地　形	遺　物	備　考
47	茶　臼　峯	丘　陵	窯址群（7基発掘）	(蔵)中野市教育委員会
48	大　久　保	同	窯址群（4基発掘）	(蔵)中野市教育委員会
49	東　池　田	同	窯滓・須恵器	(蔵)高丘小学校
50	林　畦	同	窯滓・須恵器（糸切底）	(蔵)高丘小学校
51	中　原	同	窯滓・須恵器	(蔵)高丘小学校
52	立ケ花表山	同	窯址群（2基発掘）・窯滓・須恵器	(蔵)中野市教育委員会
53	池　田	同	窯址・須恵器・布目瓦	平安期と思われる布目瓦あり
	池　田　端	同	窯址・須恵器	
	清水山裏	同	窯址・須恵器	(蔵)高丘小学校

高丘丘陵は、延徳田圃の北から西へかけて横たわり、標高340～390ｍの比較的低い丘陵であるが各所に起伏が多く旧石器時代以降の複合遺跡が多い。なかでも栗林遺跡（県史跡）は弥生中期の標式遺跡として著名である。

安源寺遺跡は古くより文献（高丘村誌・下高井郡誌・下高井）に記録され、式内社小内神社を中心に東西300ｍ、南北800ｍ、の一大複合遺跡で旧石器時代から近世に及ぶものである。すでに過去二

回にわたって発掘調査が実施され、それぞれ報告書が刊行されて、その概要を示すと次のようである。

① 第一次発掘調査　昭和26年10月5日～11日　（担当 田川幸生）

⑴ 縄文時代（前・中期）　石器片・土器片

⑵ 弥生時代（後期）　土坑墓・石器片・土器

② 第二次発掘調査　昭和41年5月27日～6月19日　（担当 金井汲次）

⑴ 旧石器時代（後期）　石器・石屑（少）

⑵ 縄文時代（前・中期）　土器・石器・土偶

⑶ 弥生時代（中・後期）　土器・土坑墓址（13）

⑷ 古　代　トンネル式無段登（1）・土坑墓址（11）・須恵器・布目瓦片（少）・土師住居址（1）・土器

⑸ 中　世　土葬墓（2）・人骨・古銭（12）・釘・火葬墓（12）・人骨・擂鉢片

⑹ 近　世　土葬墓（2）・人骨・小柄・古銭・鍔片

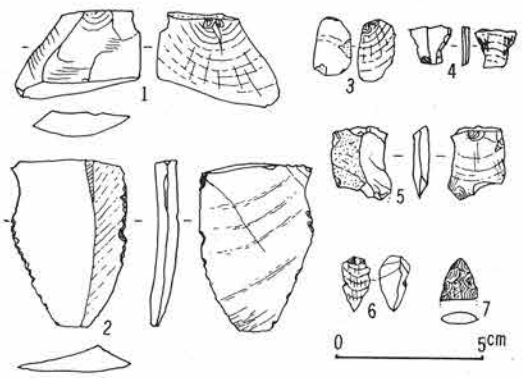
安源寺遺跡の台地に立って東南部を眺望すると中野平の美田地帯を一望におさめることができる。古くは弥生中期の時代に汀線利用の稲作開始によって、この地の米作のページははじまるのである。農耕具の発達、生産技術の向上した弥生後期には汀線の耕地は次第に拡大し、台地上の集落は一段と大きく広まった。その後歴史の進展とともに開拓は進み、生産に従事した人々の遺構・遺物が複合して発見され、現在の集落の母体をなしている。

今次の調査地は安源寺遺跡のほぼ中央部にあたり、小内神社から東へ約160ｍ離れたところにあって、標高は350～354ｍで、ゆるやかに東南へ傾斜し、日当たりがよく、付近には湧泉にめぐまれた立地条件のよい場所である。

Ⅲ　遺構・遺物

1　旧石器時代の遺物

遺物は小内神社裏150mを中心に、かなり広い範囲にわたって分布しているが、今次の調査では一次的包含層は確認することはできなかった。遺物は各グリットの表層から出土が5点、弥生1号住居址(1)、弥生1号土坑墓(2)からの2点と、合計7点のみであった。(1)は良質透明の黒曜石製の平坦形彫刻器である。(2～6)は石刃で、(2)は黒頁岩の大形石刃で使用痕がある。他は黒曜石で(5)は中形石刃、(3～5)は小形に属する石刃で、以上はナイフ期最終末にあたる。(7)は質の良い黒曜石製の尖頭器で縄文草創期に該当し、古代窯址灰原付近から検出された。



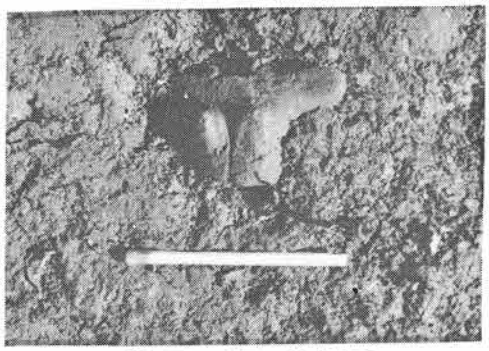
第5図　旧石器実測図

2　縄文時代の遺物

今次調査は第二次調査と同様に攪乱状態の出土遺物をみたのみで遺構は検出されなかった。遺物の量も比較的少なく、資料としては貧弱である。

土器　(第7図　1～13)　各グリットから採取したもので、前期・中期の小・細片60余点であるが割合に磨滅している。(1)は施文の様相から前期神ノ木式併行であろう。(2～13)は中期の加曽利E式が中心で量は比較的多い。胎土には砂粒・雲母を含み色調は茶褐色または褐色を呈する。

土偶　(14)はグリットL13の地表下45cmの褐色粘土層の直上から検出された。頭部と脚部を欠失した胴部のみのもので平板な形を呈し、胎土・焼成ともにかなり良好で、赤褐色であるが左手先は青黒のくすね色となっている。乳房はやや上向きに付着しているが、左乳房下部は少し欠損痕がある。肩の表裏にはヘラ状工具による沈線が二条横走し背中にはさらに縦に二条の沈線を描き、筒袖に簡単な文様を施している。縄文中期に通有する土偶片で、第2次調査の折に検出した土偶片とほぼ同形である。



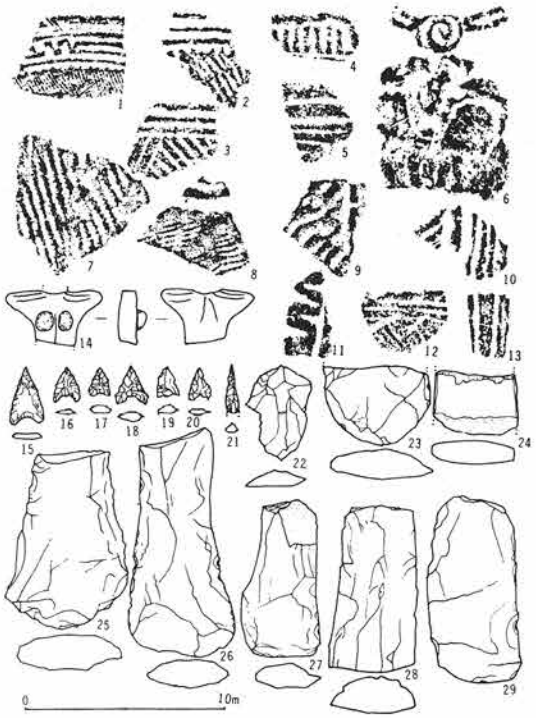
第6図　土偶の出土状況

石器　石鏃(15～20)は6点の出土をみているがいずれも無柄で、(1)以外は全般に粗雑な整形である。(15～19)は黒曜石、(20)は粘板岩を用いている。

石錐　L16グリットから検出され、黒曜石製の精緻な整形であるが基部を欠失している。

磨製石斧　閃緑岩製の破損品であるが、一部に膠着材が付着している。（24）

打製石斧　（22）は小形で先端が尖っているところから前期に位置させるのが妥当であるかもしれない。（23，25～29）は頁岩を用いほぼ短冊形をしているところから中期に比定したいが、（25～27）は作りがやや粗雑なところから弥生時代に降るかとも思われるものである。



第7図　縄文遺物実測図

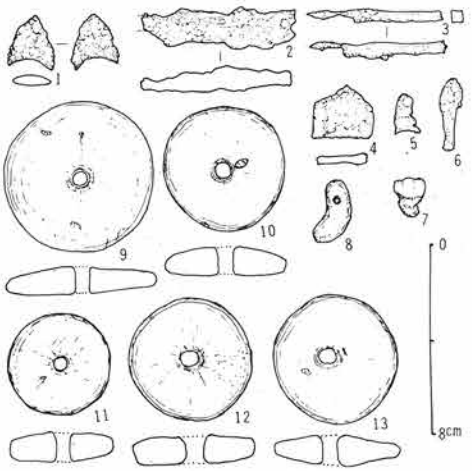
3　弥生時代の遺構・遺物

(1)　第1号住居址

発掘調査地のうちで一番南へ急傾斜（11°）の南隅にあたり、A区のA～E・15～18グリットの範囲に発見された。

遺構　褐色粘土層に掘りこんで構築され、長辺はほぼ東西8m、南北6m隅丸方形プランの竪穴住居址で、床面はほぼ水平であるが地形の関係からやや南へ傾いていた。北壁は表土（黒色）20cm下は褐色粘土層を60cm掘っていたが傾斜地のためである。南側の壁は所在しないが、東西の壁面の消えるところで画した。（第10図）柱穴状ピットは住居址の西半分の場所に5つ発見されたが、主柱とおぼしきピットは検出することはできなかった。床面には炭化材片が散乱し、とくに西北隅には5本の丸太材の炭化物が残存し、北壁は赤く焼けて火災のため焼失したものと思われる。床面には次に述べる多量の遺物が散乱していた。

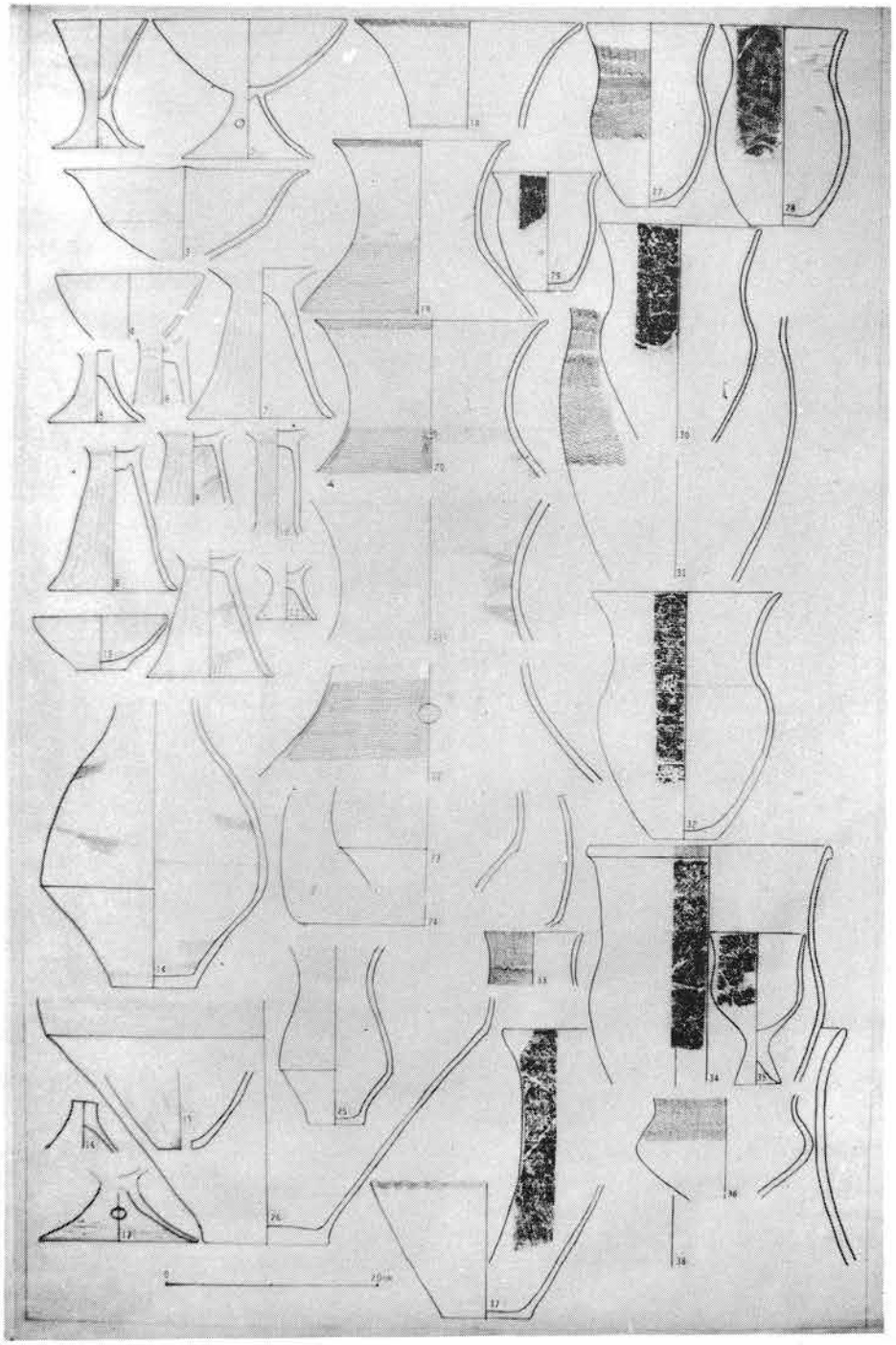
遺物　住居址内からは多量の遺物が発掘され、とくに高坏が多く西半分の床面に、鉄器・鉄器片は中央部に、土製紡錘車は東半分も中央部から北寄りの場所に発見された。



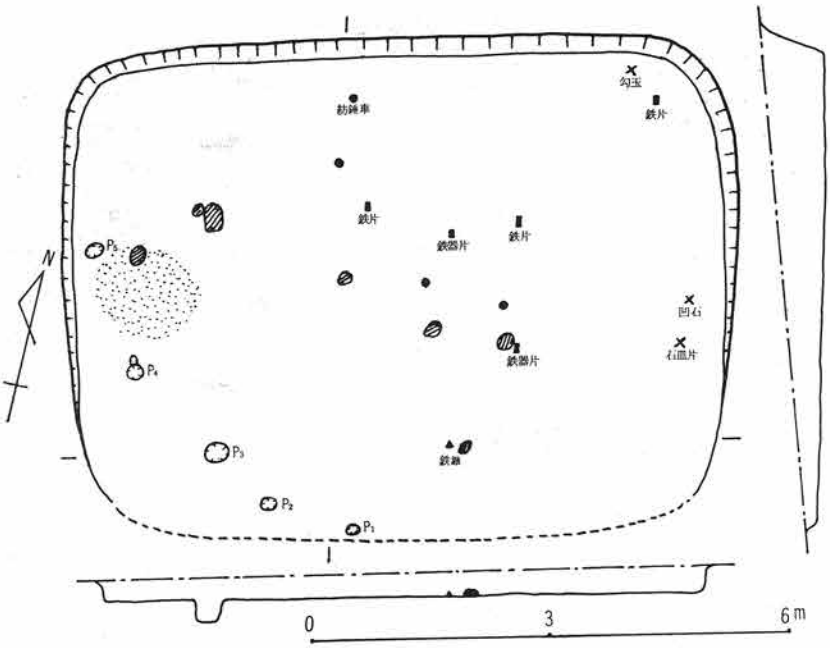
第8図　鉄器・土製品実測図

高坏　（第16図　1～12・16・17）でここに図示したほかに25個体分がある。（1）はワインカップ状の異形高坏、（3）にみるような坏部が開き外反するものは脚長、（2）のように坏部の丸味をおびたものは脚は短い。胎土焼成とも良好で、念入りにヘラ磨きを施し赤色塗彩である。（13）は赤色塗彩の鉢である。

壷　（18～26）は一般的に大形につくられ（25）は最も大きいが、（25）は現器高17cm



第９図　第１号住居址土器実測図



第10図　第1号住居址実測図

の小形に属するものもある。口縁から頸部へかけて朝顔状に収約し、頸は太く、胴ぶくれで下部の稜線は明瞭で、収約して底にいたっている。櫛描文を付し赤色塗彩して飾っている。

甕　（27～38）　大・中・小の形があり、長胴形とずんぐり小肥り形の二つのタイプにわけることができる。器面には櫛描波状文を施し、頸部に一条の廉状文を描くものが多く、一般に煤が付着している。（35・36）は台付の甕で割合に小形である。

甑　（15）　本址中ただ一点の甑片である。

土製紡錘車　完形品5個の数値は次のとおりであるが、このほかに一点の破片を検出した。

第4表　土製紡錘車表

番号	図の番号	直　径	厚　さ	孔の直径	重　さ	摘　要
1	9	6.6 cm	1.2 mm	6 mm	43 g	片面赤色塗彩
2	10	5.5	1.3	9	36	籾痕1か所
3	11	4.6	1.4	6	29	
4	12	5.2	1.2	7	37	両面赤色塗彩
5	13	5.5	1.3	7	33	籾痕1か所

土製勾玉　北隅の床上から発見（8）し、重さは4.5 gで赤色塗彩のあとがみられる。

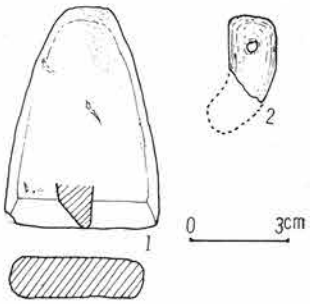
鉄器・鉄片　検出した鉄器・鉄片は7個である。釘状鉄器は本址の中央部から発見されたが、幼児頭大の自然石に長さ7 cmの磨いた条にはめ込んだ状態で、この自然石は砥石の機能をもつものであろう。

第5表　鉄器・鉄片表

番号	種　別	重　さ	摘　　要	番号	種　別	重　さ	摘　　要
1	鉄　鏃	2 g	無柄	5	鉄　片	2 g	
2	鉋	16	基部に木質残痕	6	〃	3	
3	釘状鉄	5	断面四角	7	〃	3	
4	鉄　片	5	扁平				

石器　太型蛤刃石斧の破片1点、打製石斧片2点、凹石3点、小石皿片1点の検出をみた。

(2)　第2号住居址



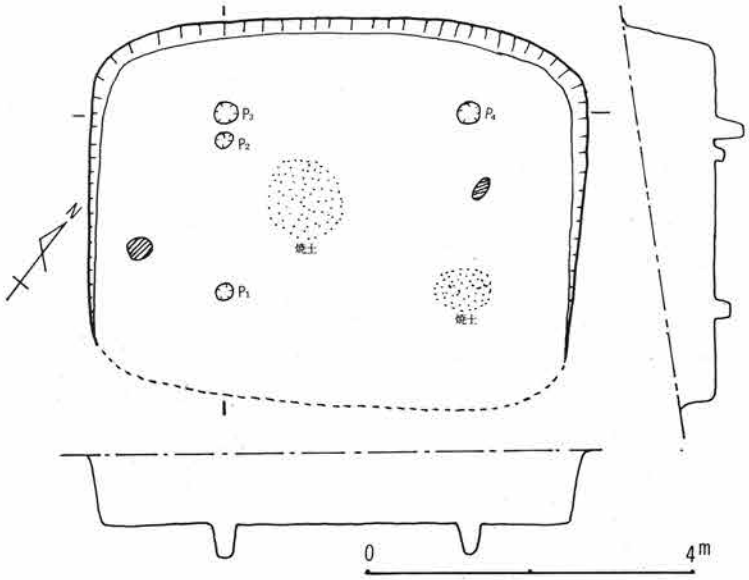
第11図　石器・土製品実測図

第1号住居址から東へ約20 m離れたM～P・12～14グリットの範囲から発見された。

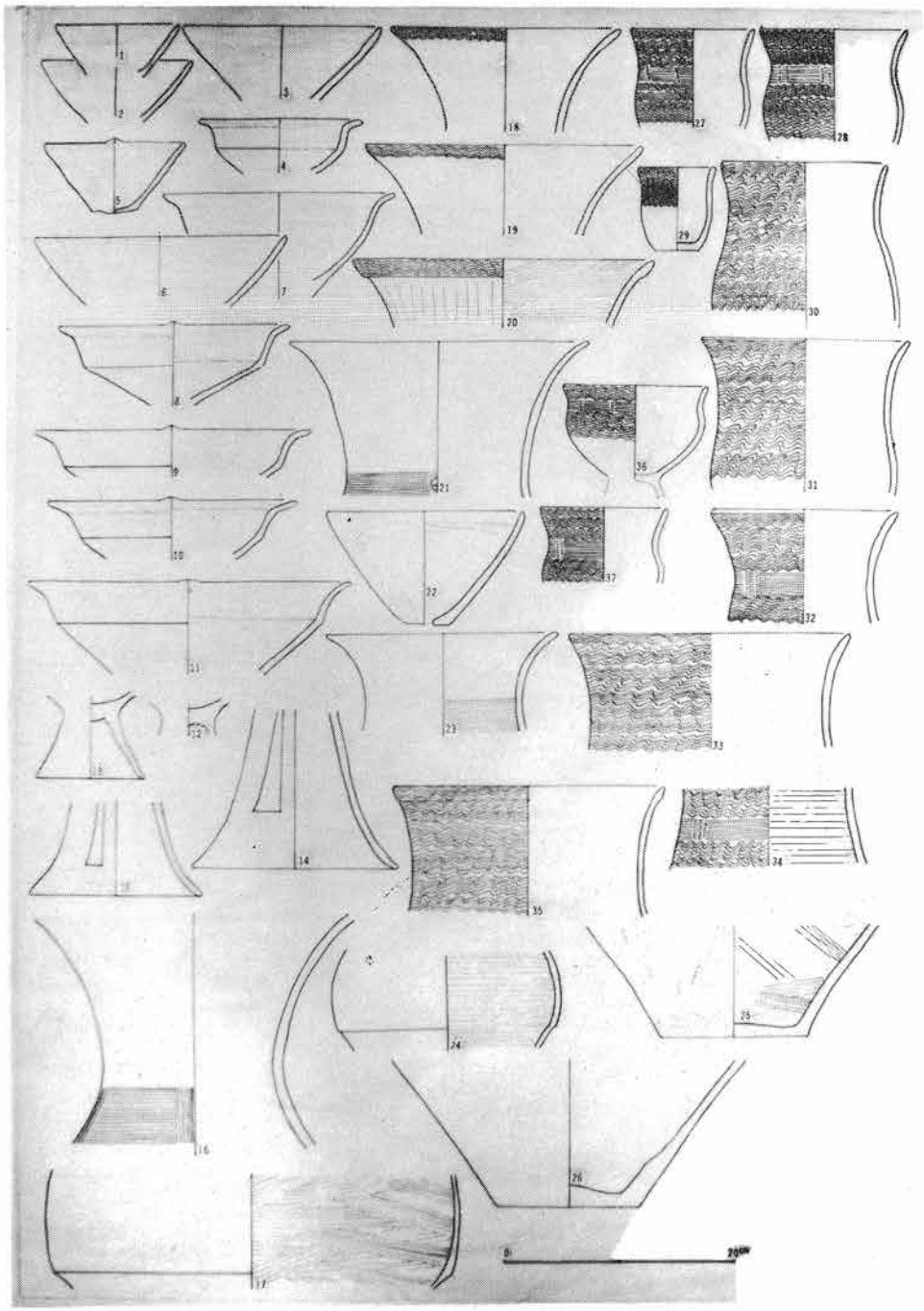
遺構　従前に畑面直しのため土の移動が行われ土層は甚しく攪乱されていたが、遺構までは鍬が及ばなかった。褐色粘土層に構築された竪穴住居址で東南に面し、長辺は6 m、短辺は4.5 mの隅丸方形プランである。3本の主柱ピットと添柱ピット1本を検出することができた。床面は堅く、ほぼ水平で焼土は2か所から発見し、北壁は地表下80 cm、東西の壁は北から南へ傾斜し南端で消え、そこを本址の南限とした。

遺物　本址内からは高坏・甑・壷・甕・片口等の土器および土製勾玉片、扁平片刃石斧・打製石斧・凹石が検出された。

高坏　(1～5)は直線で漏斗状または丸味を帯びて口縁に開く坏部で小・中形のものである。(6～11)は著しく外反する坏部で小型(6)



第12図　第2号住居址実測図



第13図　第2号住居址土器実測図

中型（ 5 ・ 7 ～ 10 ）大型（ 11 ）がある。これらは胎土焼成ともに良好で赤色塗彩が施されている。（ 12 ～ 15 ）は脚部片で（ 14 ・ 15 ）には三角の孔が付されている。

甑 （ 22 ） 高さ 9.5 cm口径 12 cmで底部には 1.4 cmの孔がある。

壺 （ 16 ～ 26 ） 大・中・小各種の壺が発見されている。胎土焼成ともに良好で赤色塗彩で飾っている。

甕 （ 27 ～ 37 ） 大小の検出をみたが、頸部の簾状文の幅広いのが特色で、（ 36 ・ 37 ）は台付の甕で煤の付着が見られる。

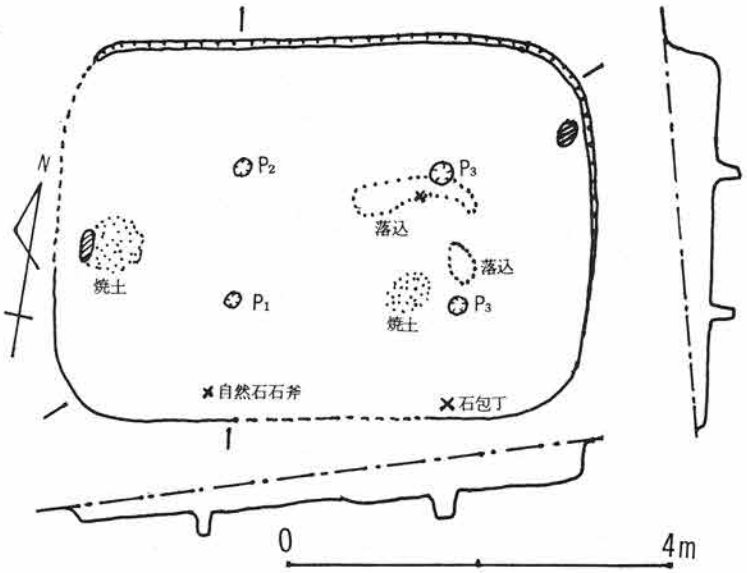
土製勾玉 本址の東隅から発見され、赤色塗彩の痕が見受けられる。

石器 扁平片刃石斧 1 点、打製石斧 1 点、凹石 1 点を検出した。

(3) 第 3 号住居址

本址はＢ地区の標高 353.5 mのところにあって割合に平坦地のＧ～Ｉ・3～4 グリットで検出された竪穴住居址である。

遺構 表土（黒色）は 10 ～ 15 cm下は黄褐色粘土層である。ゆるやかに南へ傾斜する粘土層に掘り込んで、長辺を東西に構築し 5.5 m、南北 4 mの比較的小さな隅丸方形プランの住居址であった。床面はほぼ水平で固く、北壁は粘土層を 20 cm前後掘り、東壁は南へ傾斜して 4 mで消え、西壁は果樹（桃）栽培による攪乱のため確認することはできなかった。



第14図　第 3 号住居址実測図

遺物 代表的なものを次に紹介したい。

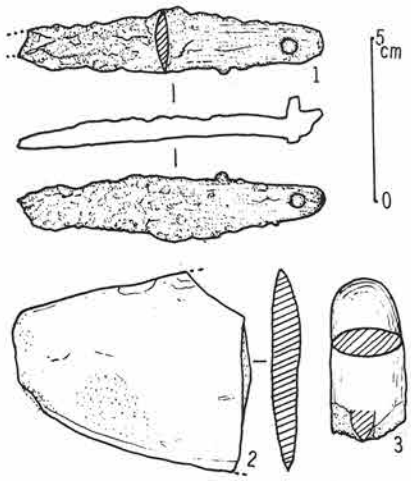
第6表　代表的遺物表

番号（第17図）	器形	法量（cm） 器高	口径	底径	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	摘要
1	高坏	(25)	22		口縁外反顕著	赤色塗彩	良	堅	赤色塗彩	山形突起 長脚？
36	〃	(12)	(13)		漏斗状外反	頸部簾状文	〃	〃	〃	ヘラ磨 胴まり状
5	鉢	5.5	14.5	5.5	〃	赤色塗彩	〃	良	〃	山形突起
10	壷	73	33	16	口縁朝顔状	〃	〃	〃	〃	超大形
21	甕	11.3	9	6	ずんぐり形	櫛描波状文	〃	〃	外橙色 内黄褐色	煤付着
29	〃	(33)	(27)	7.5	長胴形	〃	〃	〃	外灰褐色 内橙色	〃

注　（　）は推定値

高坏　（1～3）は口縁の著しく外反する坏片で（1・2）には口縁に三角突起を付して飾っている。（5～7）は脚片で（8）は大形の脚、（36）は球状の坏部で頸には櫛描簾状文を横走させ、器面はヘラ磨きが入念で、市内では田上宮前遺跡から同形の出土をみているが脚が付く、したがって本品も脚付きと思われる。以上の高坏は赤色塗彩が施されている。

第15図　第3号住居址写真

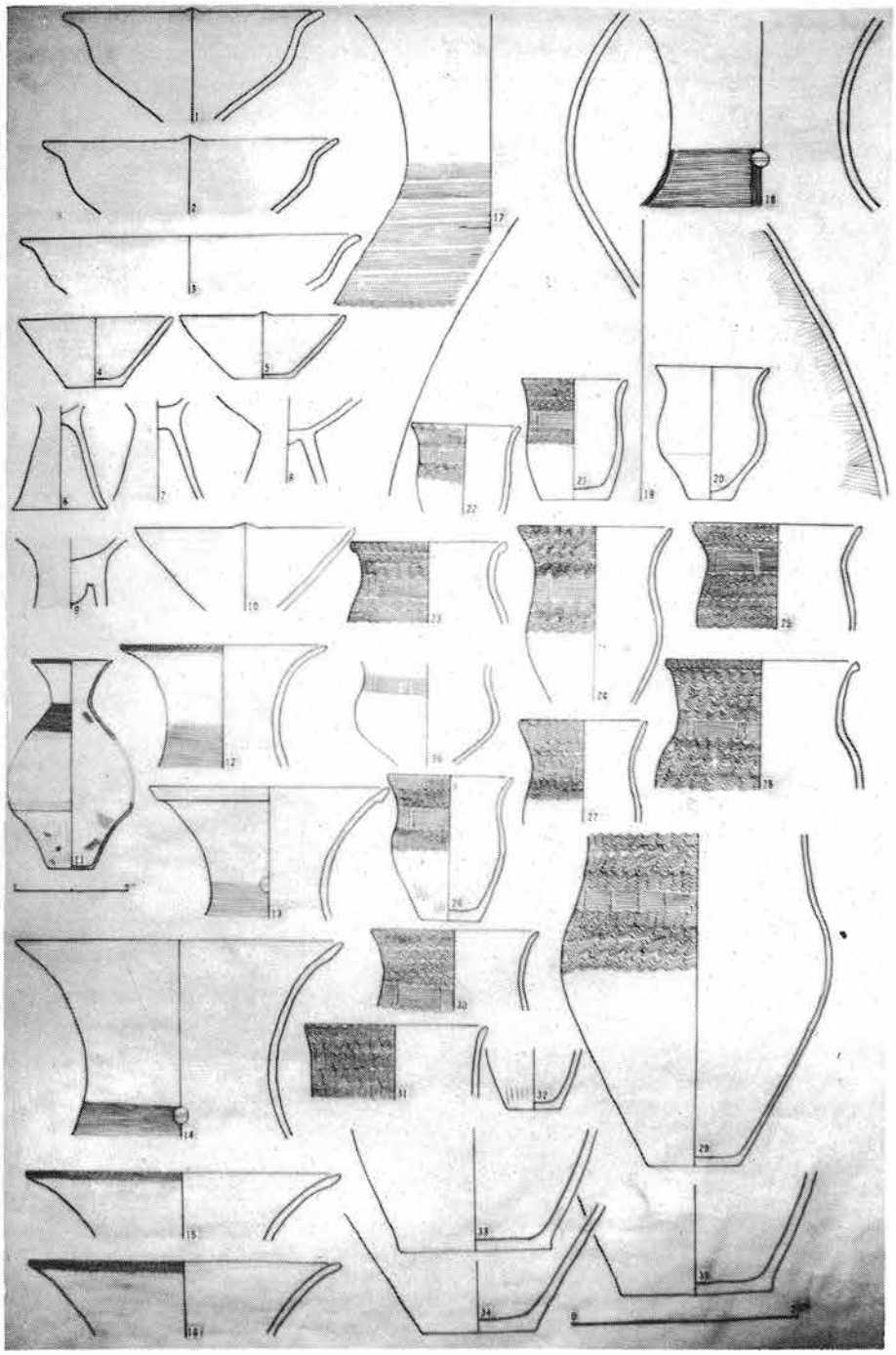


第16図　鉄器・石器実測図

鉢　内外とも赤色塗彩で飾り（4・5）は形が整い胎土焼成ともかなり良好である。

壷　（10～19）は各種の壷で大・中・小がある。（10）は超大形で第6表で述べたごとくであるが、口縁は朝顔状に大きく開き口縁には櫛描波状文を、頸と肩には幅約9cmの沈線文を横走させる。胴の中間は一部欠失しているが復元によって器は73cmを測ることができた。胎土焼成ともに良好で、大形にしては器肉がうすく、下腹部の稜線以下は集約して底にいたり、ヘラ削りの痕を残し、この部分と文様帯をのぞいては赤色塗彩の華麗な大壷である。本址の北隅（I 3）床面からつぶれた状態で検出された。

甕　（20～35）　発掘土器のすべてに櫛描波状文を付



第17図　第3号住居址土器実測図

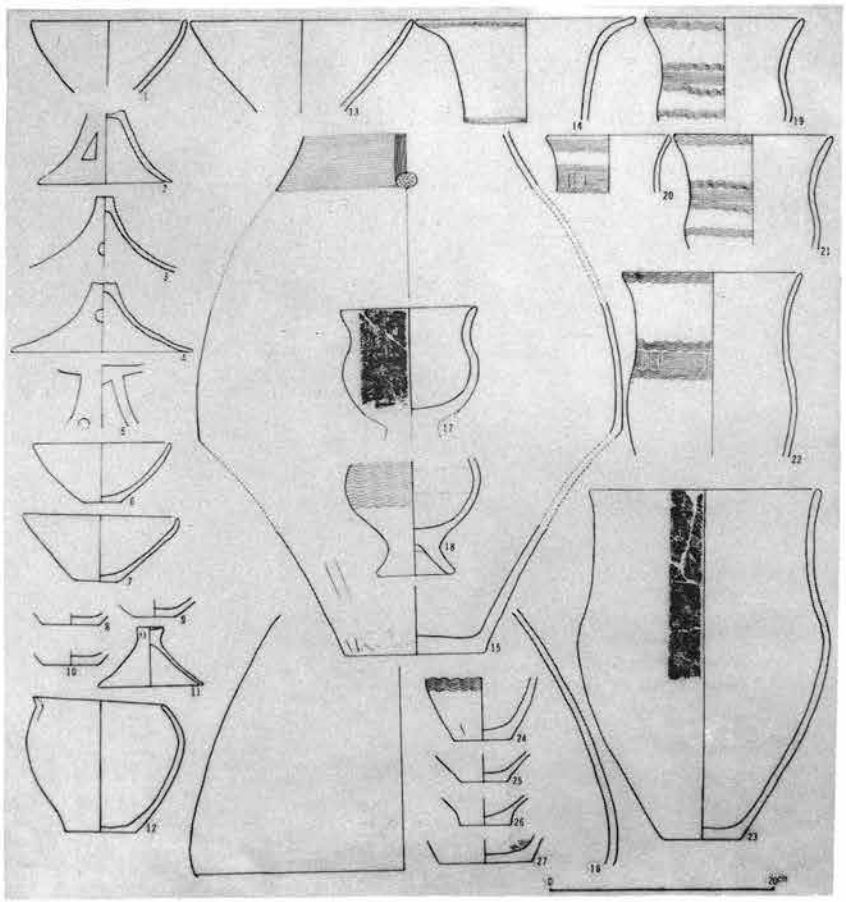
し、頸には簾状文帯を一条置くことによって文様効果をあげている。（21）は小形でずんぐり小肥り、（29）は長胴の細めの大形品である。（19）だけが無文で、外側は暗褐色、内側は褐色で胎土焼成ともに良好である。

鉈　（第16図1）は本址東北部（I3）の土器群の間から東西に水平に置かれた状態で検出された。刃先の一部は欠損して原形の長さは不明であるが現長は9.5 cm、重量は21 g。銹化が甚しいが、ほぼ中央部で折れた断面は刃幅約1.7 cmであった。基部には目釘の跡と思われる1個の突起が残存し、そこをめぐって木質痕が付着している。

石包丁　（2）　本址東縁南端（I4）の床面に密着した状態で検出され、良質の安山岩を用い、灰青色を呈し両面を磨き、刃部は念入りに磨いている。破片のため全体の形状をうかがうことはできないが、近隣の遺跡の出土例から二孔をうがった半月状のものであろう。

石斧　本址（G4）から発見された小形自然石（20g）を用いた石斧（3）で刃こぼれの使用痕がある。

(4) 第4号住居址



第18図　第4号住居址土器実測図

遺構　A地区の最北端（第1図参照）の地表下60 cmから検出されたが窯址によって切られ、また調査地区外のためその全貌をつかむことはできなかった。南壁の一部が発見されている。

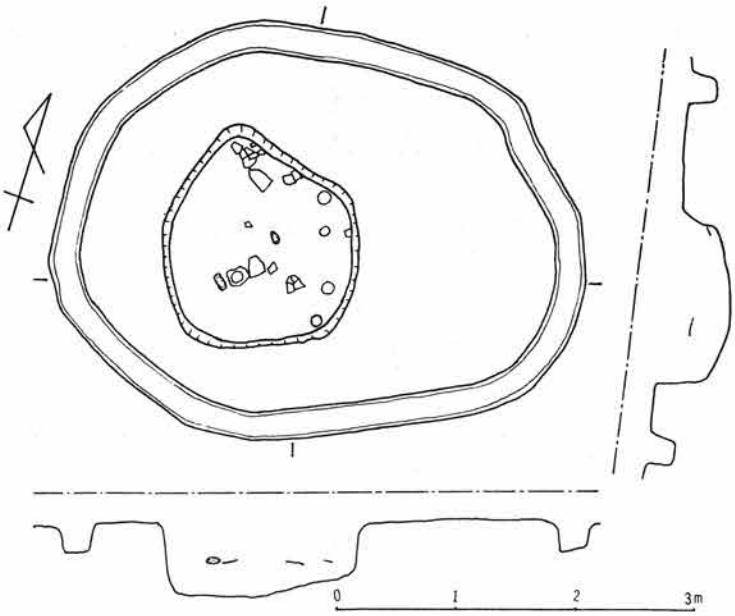
遺物　住居址の僅少部の調査にとどまったが調査面積に比して比較的多量の各種の遺物が発見した。

高坏　（1～5）　赤色塗彩は（1・2）である。鉢（6～7）と鉢底部（8～10）には内外に赤色塗彩が施されている。（12）は完形片口で、胎土焼成ともに良く黄褐色を呈するが注口は比較的小さい。

壺　（14～16）、甕（19～27）、（17・18）は台付の甕である。（13）は外側黒褐色、内面は赤褐色でヘラ磨きが行届き底部は欠損しているが甑片とみたい。

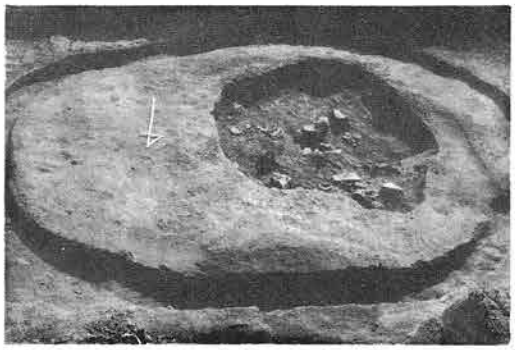
(5) 第1号土坑墓

弥生第1住居址の東隣（E～G・16～17）の範囲に築造され、周溝を配する土坑墓である。

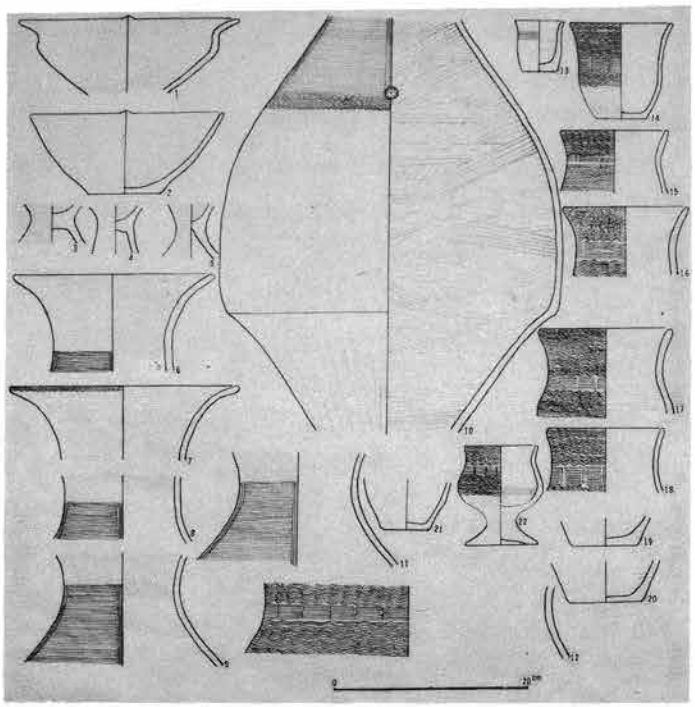


第19図　第1号土坑墓実測図

遺構　周溝の輪郭は3×4 mの楕円形で、周溝の幅は30～35 cm、深さ20～30 cmのU字形を呈していた。周溝からは土器片209点および南北溝からは土製丸玉の出土をみた。周溝の中央やや西寄りに五稜形で1.6×1.9 mの墓坑が掘られ、深さは60 cmあった。墓坑内には69点の土器片が発見された。墓域全体には1635点の土器片が覆うように置かれ、土坑墓東側からは土



第20図　第1号土坑墓写真



第21図　第1号土坑墓土器実測図

製紡錘車1個を検出した。

遺物　土器片は1876点の多量に及んだ。第7表はその内訳を示したものである。

第7表　出土土器片表

	高　坏	壷	甕	細　片	摘　　要
墓坑内	5	17	32	15	
周溝内	7	55	30	116	縄文片1
墓域全体	48	487	198	866	縄文片21、栗林式片15
計	60	559	260	997	37

縄文片22点、栗林式片15点は埋葬の折か、耕作の時に混入したものであろう。

高坏　（1・3～5）は赤色塗彩、（2）は鉢形土器で口唇に三角突起が付され赤色塗彩で飾られている。

壷　（5～11）、（9）は大壷片で頸部に櫛状工具による簾状文がめぐり円板の飾りがある。壷はいずれも赤色塗彩である。

甕　（12～20）　大・中・小の各種があり（12）は特に小形甕で墓坑内の東側から発見された。（21）は台付甕である。

土製丸玉は1.2cmの直径をもち、重量1.4gで、中心部には3mmの小孔をあけ、赤色塗彩のあとが残っていた。

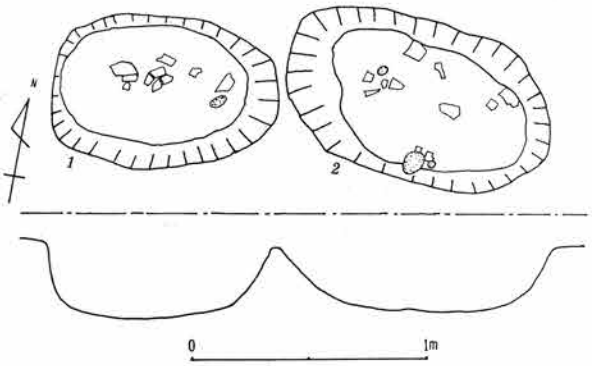
土製紡錘車は直径5.6 cm、孔の径6 mm、重量40 gのもので2か所に籾痕が残されていた。

(6) 第2・3号土坑墓

弥生第2号住居址の南側、A地区L～M 15に2基連続した状態で小形の土坑墓が発見された。

遺構 第2号址の直径95 cm、短径65 cm、深さ45 cm。第3号址は長径1.2 m、短形75 cm、深さ40 cm。いずれも楕円形を呈し、底部は舟底形であった。15 cm前の表土（黒土）以下は褐色粘土層で、この層を掘りくぼめて架設されていた。

遺物 2号址からは土器片10点、拳大自然石1個、3号址は土器片11点、幼児頭大・鶏卵大の自然石が各1個検出され、土器片は箱清水式のものであった。



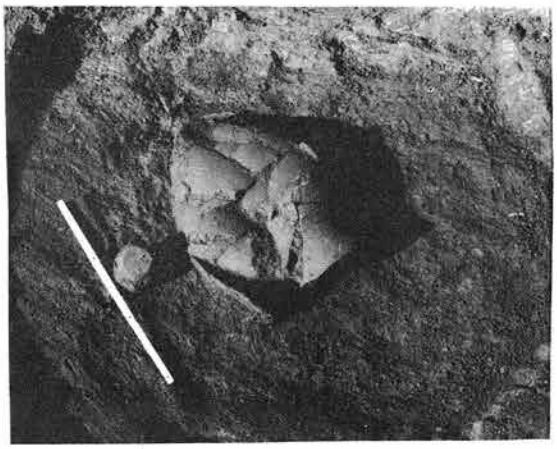
第22図 第2、3土坑墓実測図

(7) 甕 棺

B地区I 16から箱清水式大形甕が単独発見された。第2次調査地の弥生土坑墓群の北隣りにあたり、県道から丘稜上に通ずる農道の上段の緩傾斜地である。

遺構 I 16グリットのほぼ中央部の地表下50余cmから圧砕された状態で検出された。畑面直しのため土は移動し大きく攪乱されたが黒褐色の漸移層10 cmとその下の褐色粘層は原形のままで存し、遺物は粘米層を10 cmほど掘り凹めて埋納されていた。甕は横に置かれ口は東へ向け、ほぼ水平に埋められていた。甕の南5 cmのところには箱清水式土器の底1点が検出されたほかは、付近には遺物は存在しなかった。

遺物 甕はその後復元されたが、検出当時から口縁部は欠損していた。原形の器高は60 cm前後と推定され、底径9.2 cm、胴部最大径は27.5 cmの長胴形の大甕である。大形にしては器肉はうすく、外面黒褐色で所々に煤の付着痕がみられ、内面は暗褐色を呈しハケ目調整のあとを残している。外面の胴下分以下（27 cm）は無文でヘラ調整痕があり、それ以上の部分には比較的太い櫛状工具によ

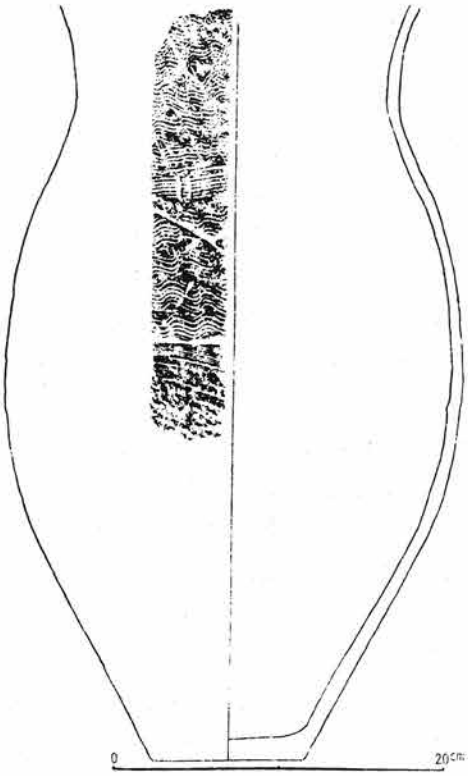


第23図 甕棺の出土状況

って波状文が施してある。施文は手描き法をとり、右あがりで不規則、所によって断絶のあるのは大形甕のため、人が甕のまわりを廻りながら施文したものと思われる。頸部には幅 1.1 cm、 6条の櫛描沈線で簾状文が横走し、所々に休止点をつけ、緩急感は文様効果をあげている。圧砕甕を発見した時は土砂が一杯につまっており、拳大の自然石（丸玉）1個が収納されていた。骨片等の遺物は存在しなかった。

以上、遺物・遺構の状態から甕棺と推定した次第である。

11月25日、一志茂樹・宮本馨太郎・金井喜久一郎先生が発掘現場を御視察くだされ種々の御教示を受けた。写真（第25図）は甕棺を御視察中の三先生である。



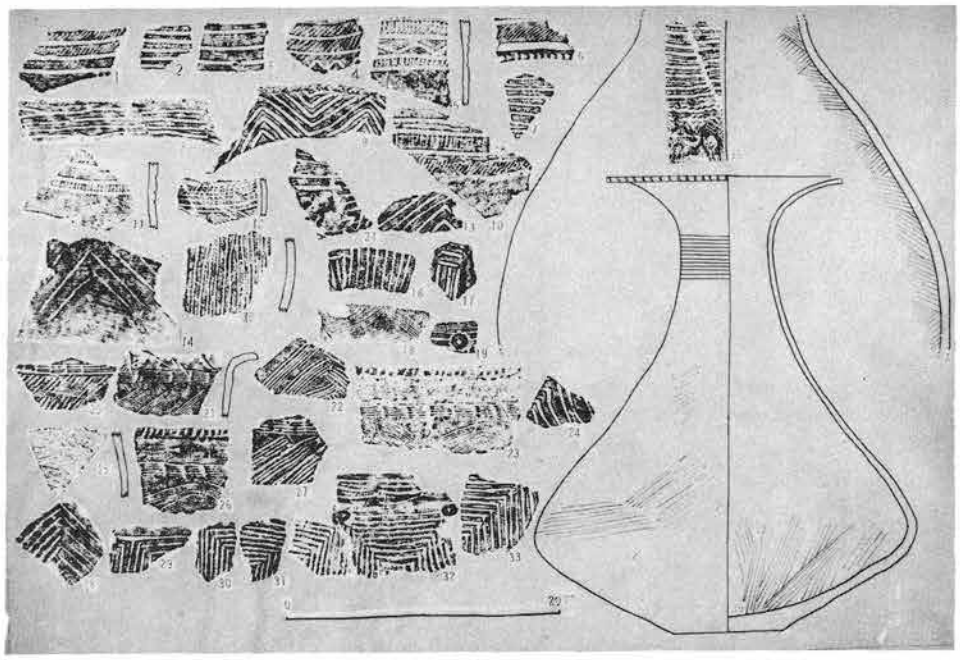
第24図　甕棺実測図

第25図　一志・宮本・金井先生の見学

(8) K16・L16出土遺物

甕棺出土地の南側一帯（K 16・L 16）の地表下60～80 cmから栗林式土器片がたくさん検出されたが、遺構は境界に接しているため確認することができなかった。（1）は頸部に太い櫛状工具による12条の沈線文をめぐらし、外面は黄褐色でヘラ調整、内面はハケ目文調整痕で橙色である。

（２）はＬ16出土の長頸壷で口唇に縄文、頸には12条の沈線文を描き、胎土焼成ともに良く茶褐色を呈する。（３～36）は拓影である。



第26図　Ｋ16・Ｌ16付近の遺物実測

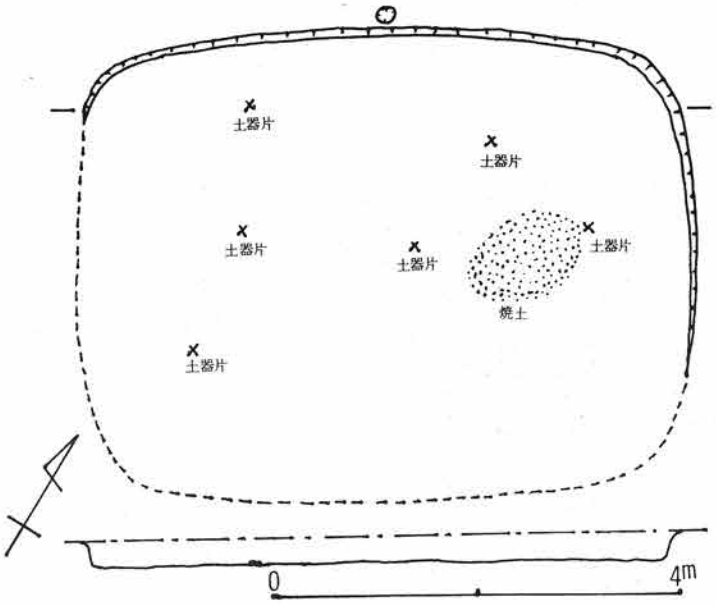
4　古代の遺構・遺物

(1)　第１号住居址

弥生第１号住居の北側に複合し、Ｄ～Ｆ・14～16にかけて検出された住居址である。

遺構　畑面直しのため攪乱されて、住居址全体のプランは確認することはできなかった。長径６ｍ、短径4.5ｍの隅丸方形の竪穴住居址と推定した。北と東の壁は割合によく残り、北壁は10～15ｃｍ、東壁は北から南へ傾斜して３ｍで消えているが、あと1.5ｍぐらいは延長するものと思われる。床は黄褐色粘土で固く、床面東北部に焼土と炭片・灰があった厨房関係の遺構はみられなかった。本址内に柱穴は存在しなかった。北壁外側中央部に１本の柱穴（径20ｃｍ深さ18ｃｍ）があったが本址に関係するものとは思われない。

遺物　（第28図１～９）　床面からは土師器片15点、須恵器片10点のみという極めて僅少な遺物であった。（１）壷の胴部（２）は甕（烏帽子形）胴下半部である。土師器片は壷片３、甕片８で煤の付着しているものがみられる。須恵器片（４～８）は甕片、（９）は高台付の壷片かと思われる。僅少な遺物と、遺構プランを明確でないため編年の位置づけは困難であるが、一応平安時代初頭の国分期のものと推定したい。



第27図　第1号住居址実測図

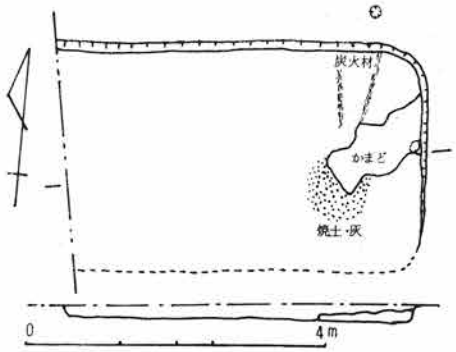
(2) 第2号住居址

調査地のほぼ中央西端（A区・E～F 8～9）に構築された竪穴住居址である。

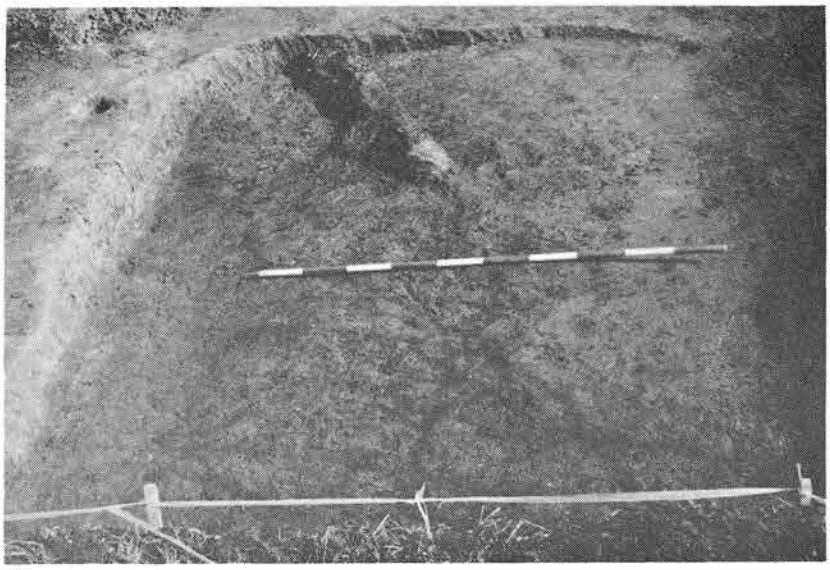
遺構　南へ約7°の傾斜地の褐色粘土層へ掘りこんだ隅丸方形プラン、長径4.5m短形3mで、境界に接しているため完掘はできなかったが長径は5mに及ぶものと思われる。北壁高30cm、東壁は北壁から傾斜して3mのところで消えた。東北隅に長さ1.4m幅60cmの粘土竈が築造されていた。南風にあって焼失した如くで、北隅には2本の炭火材が横わり、床面は炭と灰に覆われており、床面は焼けて赤褐色を呈していた。

遺物　（第28図10～13）のほか土師器細片が竈付近に10余点発見された。（11）は比較的大形の甕（鳥帽子形）、（12・13）は大形の須恵器甕片である。（10）は竈尻上右側に裏がえし状に密着していた箱清水式壷の下胴部で底部は後に穿孔している。

国分式中期の住居址と推定したい。



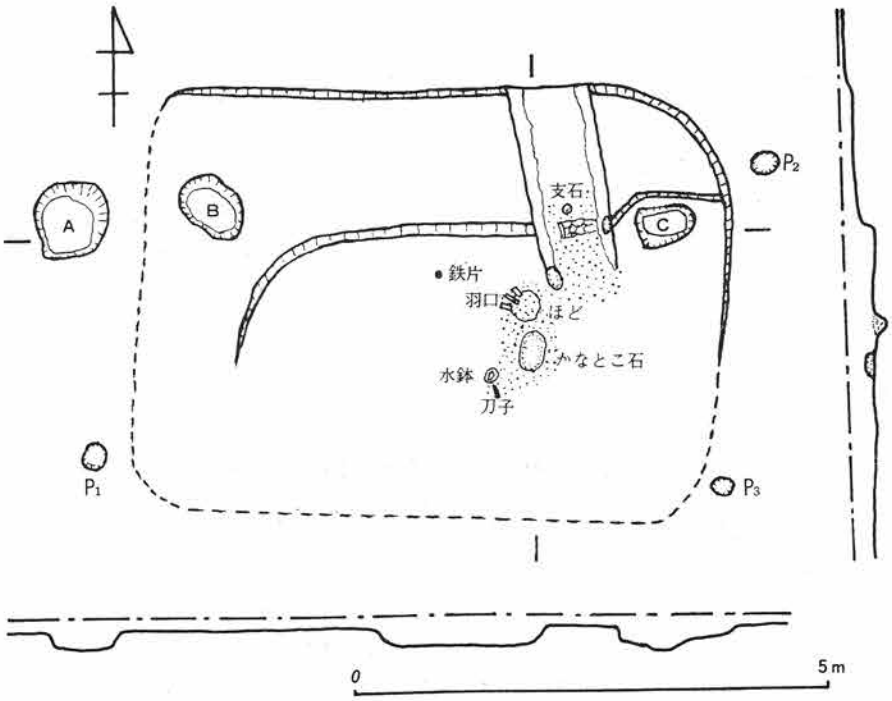
第28図　第2号住居址実測図



第29図　第２号住居址写真

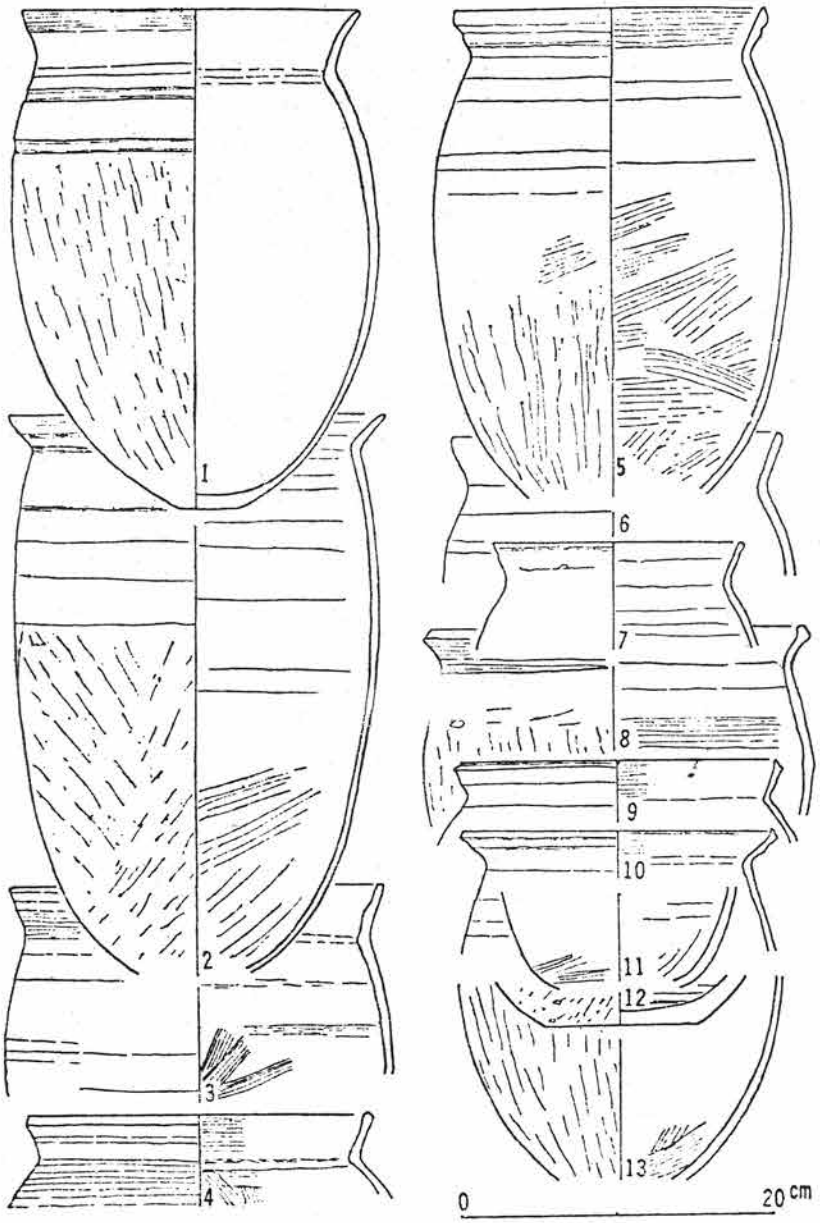
(3) 第３号住居址（鍛冶址）

今回発掘調査を実施した地域のほぼ中央の中部の南へ緩傾斜するＡ区Ｌ～Ｍ８～11の範囲のグリットに発見された古代の鍛冶屋址である。



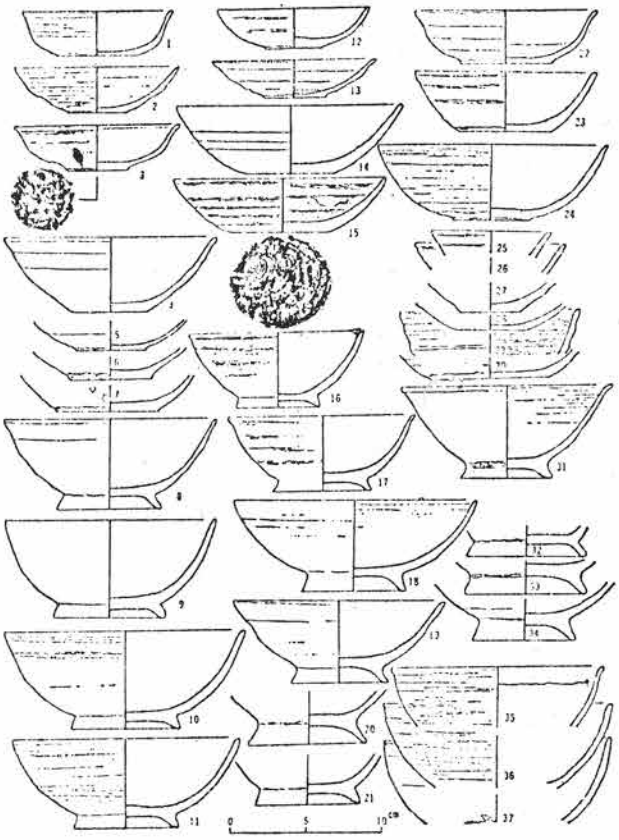
第30図　第３号住居址実測図

遺構　以前は桑園であったが、現況は野菜が栽培されていた。耕作土 ― 表土（黒褐色）は 15 ～ 20 cmと比較的浅く、この下は黄褐色の粘土層である。この粘土層を掘り込んで、長径 6 m短径 4.5 m の隅丸方形プランの竪穴住居址が架構されていた。長軸はほぼ南面であるが、やや東へふれ傾斜面の地形に順応している。北壁は高さ 15 ～ 20 cmで、 6 mの長さでよく残り、東壁は北から南へ傾斜して 4 mで消え、壁の東側に柱穴ピット（径 20 cm ）2 つが掘られていた。西壁は消えていたが北壁の西隅のカーブからプランを推定することができた。西壁の西側には長径 93 cm短径 90 cm深さ 40 cmの楕円形のピット（第30図A ）が発見され、完形坏 5 点・高台付坏 2 点とそれ等の破片多量を検出し、柱穴ピット（径 18 cm ）を発見した。



第31図　竈付近出土遺物実測図

住居址内の北壁右寄の場所には自然石を芯にした粘土竈（長 1.5 m、幅 80 ～ 90 cm ）が築かれ、竈内からは烏帽子形土器 2 個体・支石・木炭片・灰が出土し、竈付近からは坏片が発見された。本址の北側にはカウンター状遺構が残っていたが、本址架構以前の竪穴住居址の一部を利用し、物置台等に利用したのではあるまいか。ピットBには底にムシロの炭化したものが残り、その上に炭化したト



第32図　住居址内出土遺物実測図

チの実が3個残っており、ピットCは厨房関係の貯蔵穴である。

鍛冶遺構は東半分のによく残存していた。竈の左側前には 30 × 35 cmのほぼ円形のほどがあり西端には3本の鞴口が等間隔に並べられ、中央部の鞴口（第33図2）最後まで使されたものであろう。ほどの深さは20 cmで炭片(マツ)鉄滓・焼粘土が一杯につまっていた。ほどの横には5.60 kgの自然石（長径60 cm短径25 cm）が据えられ、熱と鍛造にたたいたためにひび割れがあり、三面に鉄銹が付着していたところから面を替えて利用したことがわかる。かなとこ石の右には水鉢に使用した須恵質の甕の下胴部（第33図4）が置かれていた。これ等の鍛冶遺構の周辺からは鉄器片・鉄滓が発見され床面は鉄銹のために赤褐色を呈し、木炭片・灰等が撒布していた。

遺物　27 m²の住居址内の床面・カウンターの上・2つの貯蔵穴・竈内および竈付近には各種の遺物があり、特殊なものとして鍛冶遺構・遺物があり、それに関連してAピットの遺物がある。これ等のものについて、以下その概要を述べたい。

① 住居址内の遺物　（第32図1～37）竈付近から大部分が検出されているが、カウンターの上やB・Cピットからも少量の出土をみた。坏は（1～30）で（12）は完形品で口径10 cm器高2.7 cm 底径2.8 cmの小形のもので内外とも黄褐色を呈し、胎土焼成ともかなり良好で糸切底である。この種の小形に属するものは（1～3・13・25～27）がある。坏（15）も完形品で口径14 cm器高3.5 cm 底径6 cm でロクロ引きの痕がよく残り、底は糸切りで胎土焼成もよく褐色を呈する。このタイプは（4～7・14・22～24・28）がある。（29～30）は須恵焼の坏で灰青色を呈し（30）は糸切底で、（29）もおそらく糸切底であろう。

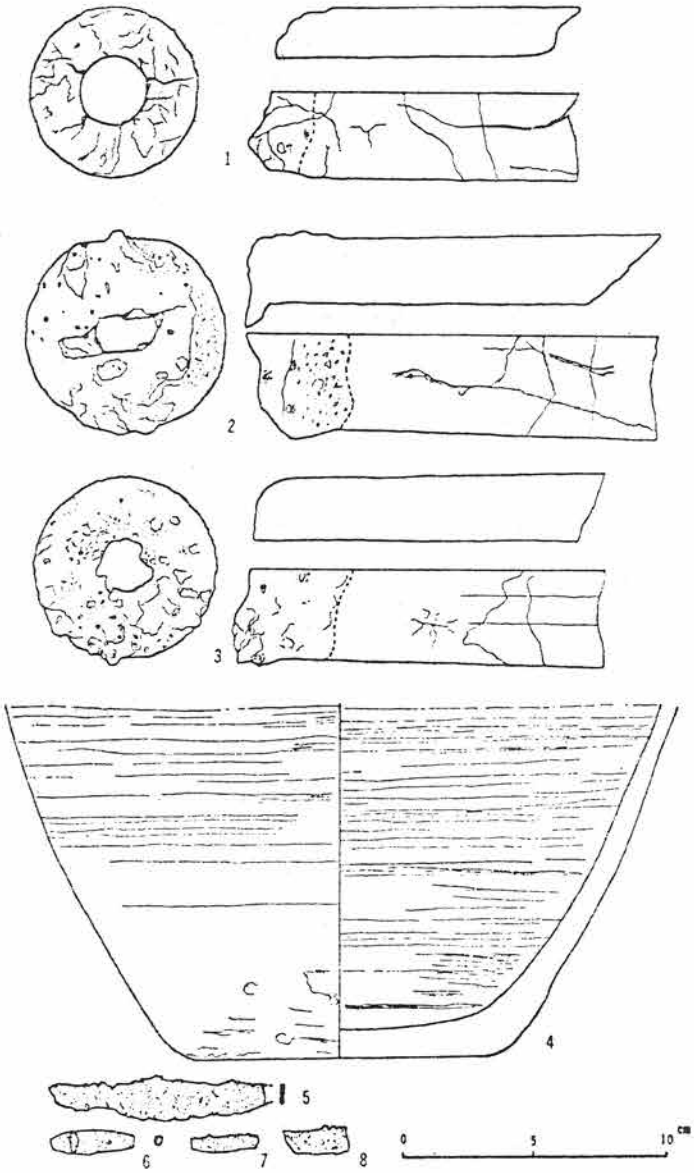
高台付坏（8～11・16～37）は大・中・小の各種がある。（16）は小形の完形品で口径 11.5 cm 器高5 cm 底径5.5 cmの均整のとれた美しい器形をもち、外面は黄褐色、内面は黒漆でヘラ磨が行き届き、胎土焼成ともに良好である。図示した高台付坏は、外面は黄褐色または褐色で、内面は黒漆に磨かれている。

このほかに土師器の細片、須恵器の細片（甕・坏）等があった。

Bピット（長径84cm短径58cm深さ30cm）出土のトチの炭火物は直径2×2.2cmで、底に敷かれたゴザ状炭化物（禾本科質）の上に置かれ、このほかにも2個分の細片が残存していた。Cピット（径65cm深さ20cm）の底には小石群があって、糸切底の坏細片数点があった。

② 鍛冶遺物 （第33図1～8）

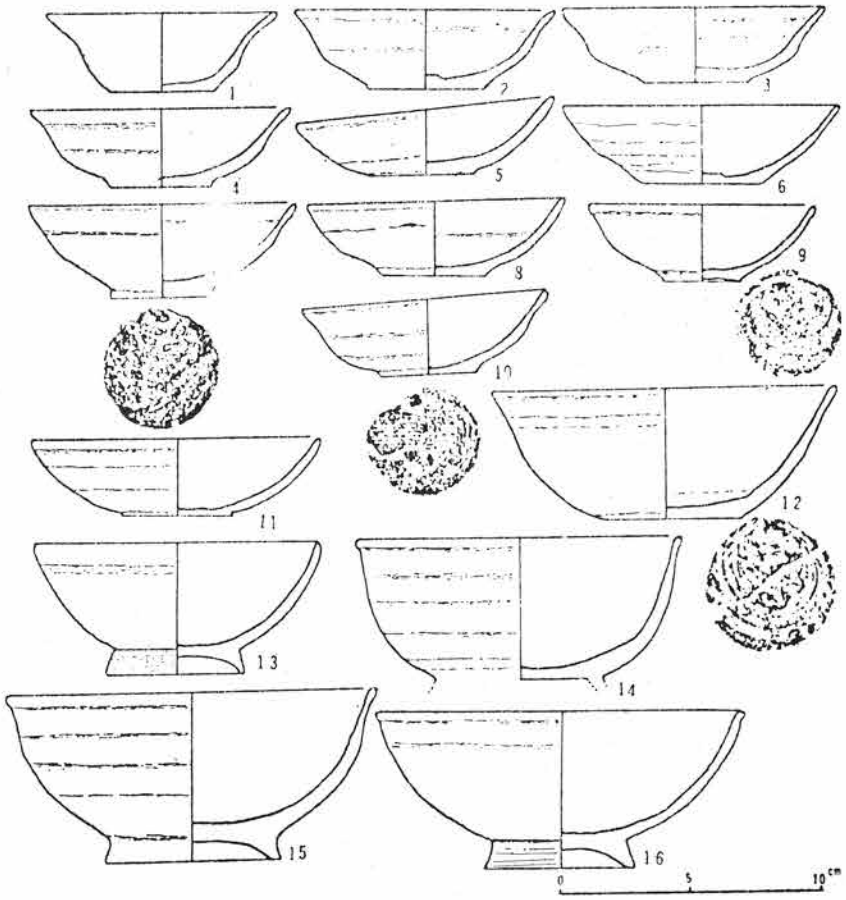
鞴口（1～3）ほどはすり鉢状で、このほどの西側に3本を横に並べた状態で発見された。いずれも黄褐色の筒状を呈し、胎土に小豆大の砂粒を混入、焼成もあまり良好とはいえない。筒元には鞴へ接続する桐筒を挿入する凹みをつくり、鞴口の先は丸味をおび、鉄分が付着して光沢がある。（1）は一部を欠失し、（2）は完形品で、最後まで使用したものとみえてほどの端に挿しこむように置かれ、筒先には鉄分の付着が甚しく通風孔は半分以下にせばまっていた。（3）もほぼ完形で筒先に鉄分が着いて凹凸が多いものであった。



第33図　鍛冶関係遺物実測図

第8表　鞴　口　表

	長　さ	直　径	孔の内径	重　量	摘　要
1	11.4 cm	6.3～7.8 cm	1.3 cm	480 g	一部欠損
2	15.5	7.2～7.6	1.2	820	完　形
3	13.2	6.4～7.4	1.1	700	ほぼ完形



第34図　Aピット内出土遺物実測図

第２次調査の折に本址の下方約 30 m の場所から同形同質の鞴口の破片１点を発見しているが、この鍛冶址と関係するものであろう。

水鉢（４）はかなとこ石の右側に置かれた褐色を呈する須恵甕の胴下部片を利用して水鉢にしたものであろう。甕片を巧みに工作しその口径は 25 cm器高13.5 cm底径 11.5 cmで、胎土焼成ともに良好にして内外面にハケ目調整の痕がある。

鉄器片　（５～８）刀子片（５）はかなとこ石の前方床面から検出され、現長8.2 cm最大幅 1.6 cmである銹代が甚しく形態は明確にすることができない。（６～８）は鉄器小片でかなとこ石と水鉢の付近から発見され（６）は鉄鏃片かとも思われる。

本址内から小さな鉄滓数点、またＬ６からは大形の鉄滓の出土をみているが、本址の鍛冶に関係するものである。

③　Ａピットの遺物　（第 34 図１～16）

カワラケ状の小形坏（１～10）の多いことは注目された。（11・12）はやや大振りの坏で、これらの坏はロクロをもって仕上げ、底には糸切痕がある。胎土焼成とも良好で、内外面は褐色が多いが黄褐色を呈するものもある。完形品（１・３・５・６・８・10）の多いことも興味がある。この図示したほかにも多量の坏細片があった。小形の（１）の口径8.5 cm 器高４cm 底径４cm、大形の坏（12）は口径 13 cm 器高５cm 底径５cm を算えるものである。

高台付坏（13～16）は胎土焼成ともに良好で外面は褐色のもの黄褐色のものがあるが内面は黒漆でヘラ磨きが行き届いている。（13）は完形品で口径10.5 cm 器高５cm 底径5.2 cm、（16）も完形で口径 13.7 cm 器高６cm 底径5.5 cm である。このほかにいくらかの破片を検出した。

④　竈付近の遺物　（第 31 図１～13）

竈付近から検出した土器は甕・坏・高台付坏で、ここでは甕（烏帽子形）について述べたい。（1・2）は竈内の焚口より少し奥まった場所から横転し、圧砕されて出土した。（1）は復元によってほぼ完形となり口径21.5cm器高32cmを計り、底部は丸底に近いが、しいて計測すると直径3.5cmであろう。口縁は外反し器形は長胴形をとるが左右均整ではない。外面の整形は上胴部まで横なでし、胴部から底部に至る間はヘラ削りの痕がある。器肉は割合にうすく、内外ともに褐色で、胎土焼成ともに良くない。（2）は更に長胴の大形のものである。

他の甕片は口縁は短く外反・内彎する二形態があって、いずれも長胴形を呈し、胎土焼成ともに良好でない。色調は褐色または黄褐色で煤の付着するものもある。

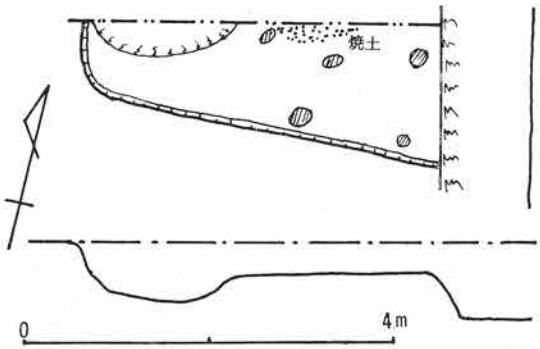
Aピット出土遺物は鍛冶師が神に供饌した坏類を収納したものとみたい。古来火は神聖視され、その火を扱う鍛冶仕事は清浄を旨とし、現在の鍛冶師たちもこの掟を守り続けている。12月8日には守護神を祀る鞴祭が挙行され、豪華な神饌品が供えられる。

平安時代中期の本址の鍛冶師も鞴祭を盛大かつ厳粛に催し続けたものであろう。

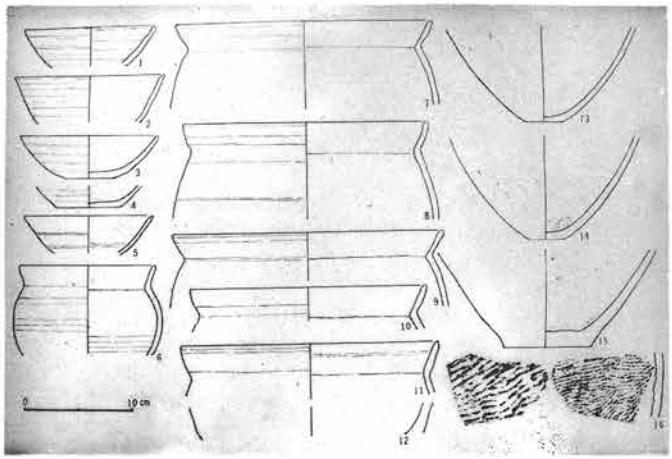
(4) 第4号住居址

A地区北隅（N・01～1）の地表化30cmから検出された隅丸方形の竪穴住居址の一部である。

遺構 標高354mにあって、東側は農道の拡幅時に1m位カットされ、北側は高見沢信秀氏の果樹園に接する為住居址の三分の一の調査にとどまった。本址は南面し、長辺は5m、短辺は3.5～4m程度であろう。南の壁は4mが検出され褐色粘土層に15cm程掘り込まれていた。西壁は1.4mの検出にとどまり壁高は15cmであった。西壁の北側には径85cm、深さ50cmの土拡が出土し、土師器片・須恵器片・炭片等が少しあった。床面は褐色粘土で固く、土師器片・須恵器片・自然石（5個）が発見され、北側中央部に焼土（径50cm）と周辺に炭辺と灰が散布していた。



第35図　第4号住居址実測図



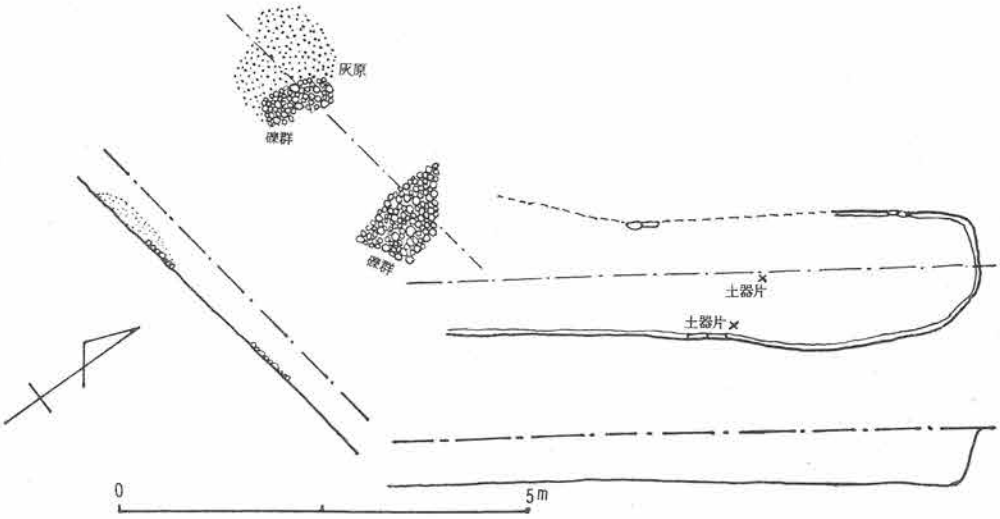
第36図　第4号住居址土器実測図

遺物　（第36図1～16）

坏（1～4）は土師器でロクロで仕上げ、糸切底、外面は褐色または黄褐色を呈し、（2～4）は内黒である。（5）は青灰色の須恵坏である。（6）は小形の甕で内外ともに黄褐色で胎土焼成ともに良好である。（7～10）は甕（烏帽子形）の口縁部片、（13～15）は胴下半分片、（12・16）は須恵の甕片である。平安中期頃の国分式に該当する。

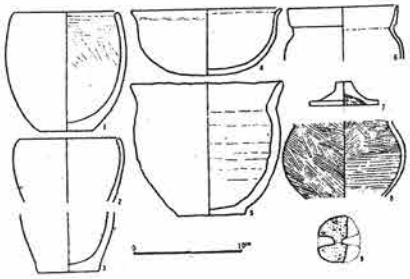
(5) 土師窯址　（第37～39図）

丘頂近い鞍部で標高は354 mを算え、南へ緩傾斜地で箱清水式弥生住居址（第4号）を切って構築していた。



第37図　窯址実測図

遺構　A区H～L 1″～2の範囲に北東～南西に長軸をもつ半地下式の土師器の平窯である。地表下70 cm（表土30 cm、黒褐色漸移層28 cm）で褐色粘土層へ12 cm掘り込んであって、窯長6.8 m、幅1.5～1.8 mであった。北東の窯尻から南西の焚口へは僅か傾斜すると思われるが窯底はほぼ水平とみてよい。窯床には木炭片や灰が敷きつめるように所存し、一見炭焼窯を思わせる状況で、床上には土器片数点のほか自然石（丸石）2個があった。右壁は良質粘土（橙色）が焚口から4.5 m続き、火焔のため3～4 mが焼けてあたかも煉瓦状に見受けた。左壁は黒色土層のため窯壁は不明確であったが、燃焼部に30 cmの長さで、幅7 cmの砂岩が焼けた状態で検出されたため一応窯壁の限界と推定した。窯尻も弥生住居址を切っているため土層は著しく攪乱されているため明瞭に画することは困難であった。焼成部付近には窯壁の焼土が落下し床の上に充満しているのが見られた。



第38図　窯址内・灰原出土遺物実測図

焚口前の西には川原の小石を粘土で張り敷きつめた三角形の敷石遺構が所在したが、燃焼の折の坐席か、土器製作の工作址かは判定しにくい。この種の敷石遺構は灰原の東側にも1か所あった。灰原では土器片・焼土塊・木炭片（マツ・ナラ・クヌギ）灰等が1×1.3mの範囲に35cm余の高さに積んだ状態で発見した。この灰原からは紡錘状の径4.5cmの多孔質火山岩（軽石）が検出され、中心部に孔をあけたものがあったが、用途は不明である。

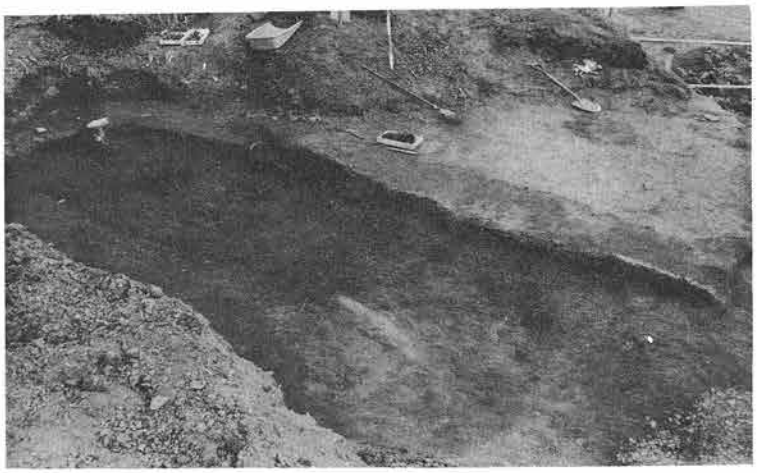
工房址を検出したいと思ったが、今回の調査地の範囲からは発見することができなかった。しかし窯址の東南隣りに橙色の良質粘土がH～L 1～2にかけて人為的に貯蔵したかとも思われる場所があった。

遺物　（第38図1～7）

窯址内からは（2・3）のほか土師細片数点が検出され、灰原からは（1・4～7）のほか相当量の土師細片を得た。

（1）は口径10cm器高11cm底径4.3cmの甕で外面は赤褐色、内面は黒色で少し砂を混入しているが焼成は良好である。（2）は窯址内の中央部から（3）は焚口から発見された鉢と甕の下胴部片で二次火焔によって赤褐色となり、所々に火焔による剥離痕がある。盌（4）は口径13.8 器高6cmの毬状の底を呈し、口縁はやや外反する。胎土焼成ともに良好である。手ずくね土器（5）は口径14cm器高12cm底径6cmの器肉が厚く粗製である。（6・8）は小形甕の破片で、（6）はヘラ磨きがなされ、（8）はハケ状工具の内外面を調整している。（7）は小形高杯の脚部である。

以上の遺物は和泉期に比定され、近傍の遺跡では祭祀遺跡として著名な新井大ロフ遺跡（中野市新井）の遺物に近似し、5世紀後半の窯址であろうと考えたい。

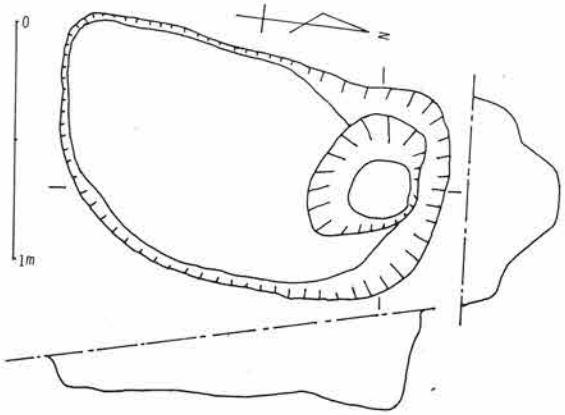


第39図　窯 址 写 真

(6) 土 坑 墓 （第40図）

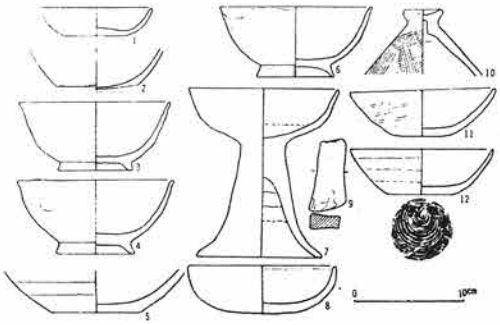
古代第3号（鍛冶址）の東隣3m（09）の南へ約7°傾斜する所に1基の土坑墓を発見した。

長軸はほぼ南北に長径1.65m短径1.05m、地表化47cmで、楕円形を呈し舟底形であるが北隅には凹みが掘られていた。遺物は僅少で土師細片と須恵細片のほか凹石があったが、凹石は落ち込みであろう。土器片は細片のため時代判断は困難であるが国分式も早い頃とみたい。



第40図　土坑墓実測図

(7) H12・K12付近の遺物 （第41図）



第41図　H12・K12付近の遺物

内黒の（5）の底部片を得た。このほか土師器細片を多量に採集している。

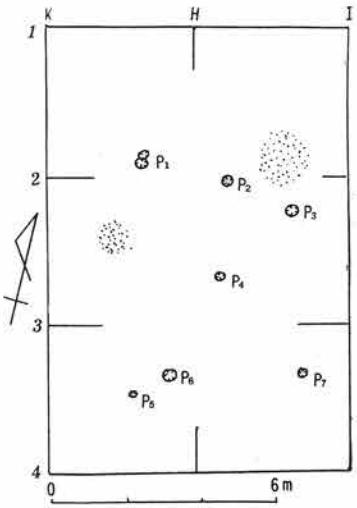
② K12 （第41図7～12） 古代第3号住居址（鍛冶址）の南2mの場所にあって径約1.8mの円形に凹地がつくられており、塵芥捨場という感じの遺構があった。この凹地の南側には地表下25cmに径800の範囲に焼土・灰木炭片が積まれ国分式の土師器片（11）須恵片（12）や砥石（9）があった。このほか土師・須恵細片が多く、鍛冶址の塵芥捨場とみたい。同グリット北隅からは 鬼高期と 思われる 高坏（7）盌（8）蓋（10）を検出した。

(8) 柱 穴 遺 構 （第42図）

調査地の北端に、柱穴7、焼土群2か所を検出したがその構造は把握することができなかった。

① H12 （第41図1～6）

H12グリットの南隅には径25cm深さ12cmの柱穴ピットを発見したほかは遺構の検出はなかった。畑面直しのため遺構は消滅したものであろう。遺物は国分式の土師器で糸切底の坏1点（1）、高台付坏4点（2～4・6）で内面黒漆のものと、

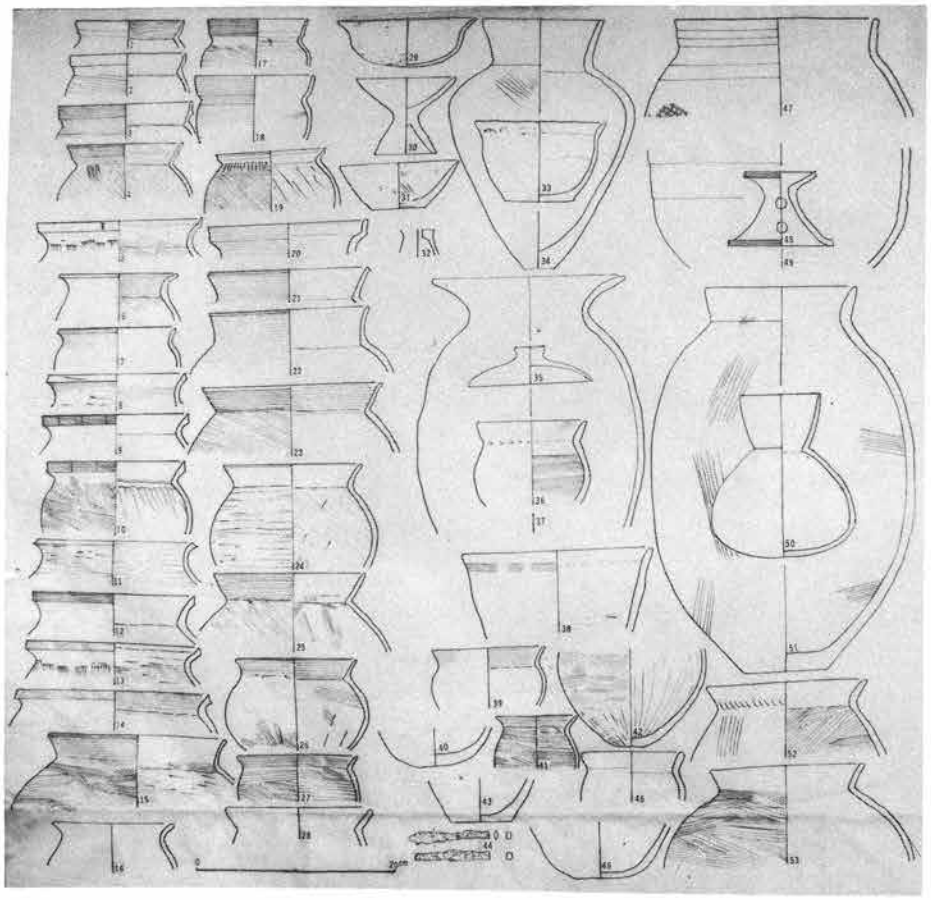


第42図　柱穴・焼土群実測図

(9) 窯南出土の遺物 （F・G2～3）

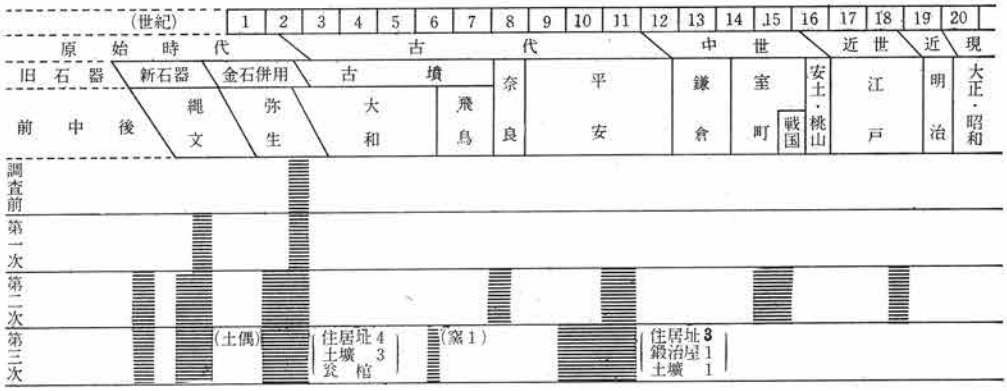
北に土師の平窯・灰原があり、東には弥生第3号住居址があって、住居址を思わせる平坦な床面上から多量の土器・鉄器・工作台石・焼土等を検出したが、柱穴ピット、周壁の住居址プランをきめる遺構は発見することができなかった。表土は浅く、桑栽培や果樹栽培による攪乱によるものであろうか。

遺物第43図（1～29）はきわめて豊富で高坏・壷・甕・坩等で品種も多様であるが、紙面の都合で説明は省かねばならない。和泉式のもので窯にセットするかとも思われる。出土状態の写真はフイルムのセット不良から空写真1本分となったため提示することができないのが惜しまれる。



第43図　窯南出土・表採等の遺物実測図

Ⅳ　結　　び



第44図　安源寺遺跡年表

安源寺遺跡の発掘調査は3回に及んだ。その成果は第44図に見られる内容で、発掘調査前までは弥生後期（箱清水式）の住居址群と、僅少な縄文遺跡の出土で知られていたに過ぎなかった。

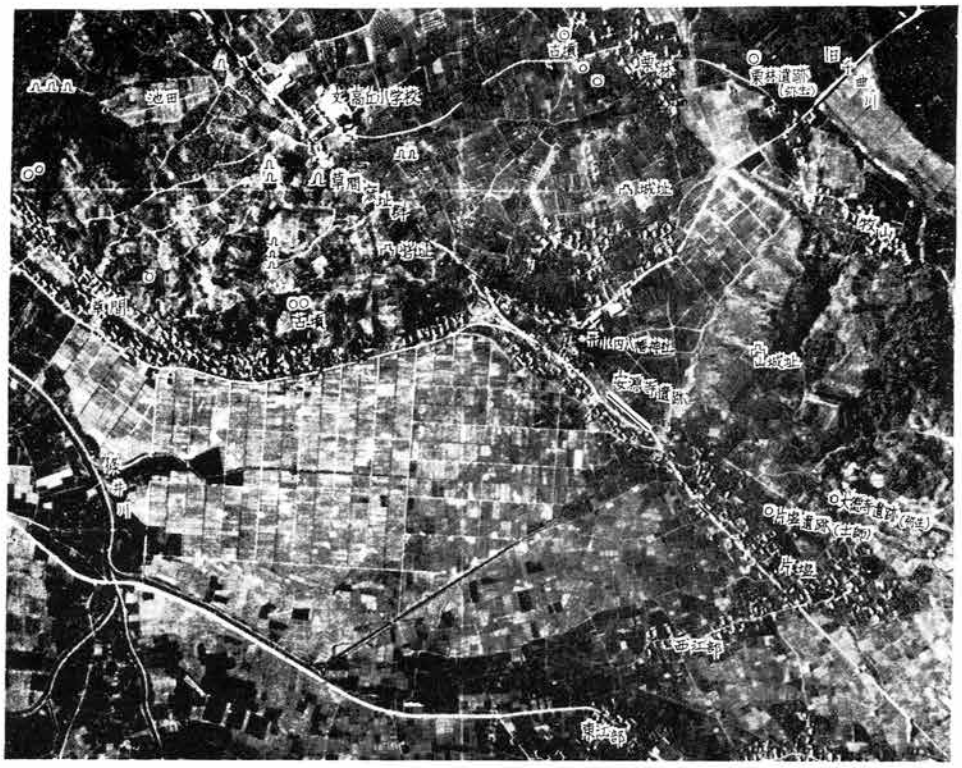
今回の第3次発掘は1028 m² の調査地域から次のような成果をあげることができた。

1. 旧石器（後期）の黒曜石製石器を主体とする遺物7点の検出をみたこと。
2. 縄文前期から中期にわたる相当量の遺物を発見し、とくに平板形土偶1点を得ることができたこと。
3. 弥生前期（栗林式）土器片を多量に検出することができたこと。
4. 弥生後期（箱清水式）住居址4、土坑墓3のほか各種遺物が出土し、金石併用期の様相を具体的に示す資料が多く、幻の箱清水式文化究明に資することができること。甕棺検出はこの地域の新事例であること。
5. 窯は半地下式平窯で和泉式土師器を焼成したものであること。新井大ロフ遺跡の土器群と近似していて、今後その究明の手がかりが得られること。
6. 平安初期から中期の住居址4戸の検出を見、第3号址は鍛冶址で古代の集落構造を考究する上で貴重なものであること。また、土坑墓1基の出土をみたこと。

以上であるが、限られた紙数のうえで筆足らずの報告で御理解しにくいと思うが、先学の方々の御教示をいただきたいと存ずるものである。

末筆であるが遺構測量は黒崎利男・金井文司氏が担当され、遺物の整理・復元は小池久男・池田実男・畔上克臣・荒井よしゑ・深見晴彦氏によって、遺物の実測は小池久男・深見晴彦氏の手伝いを得た。また、編集は山口耕一・岩戸啓一氏にあたっていただいた。記して心からお礼を申しあげる次第である。

金　井　汲　次

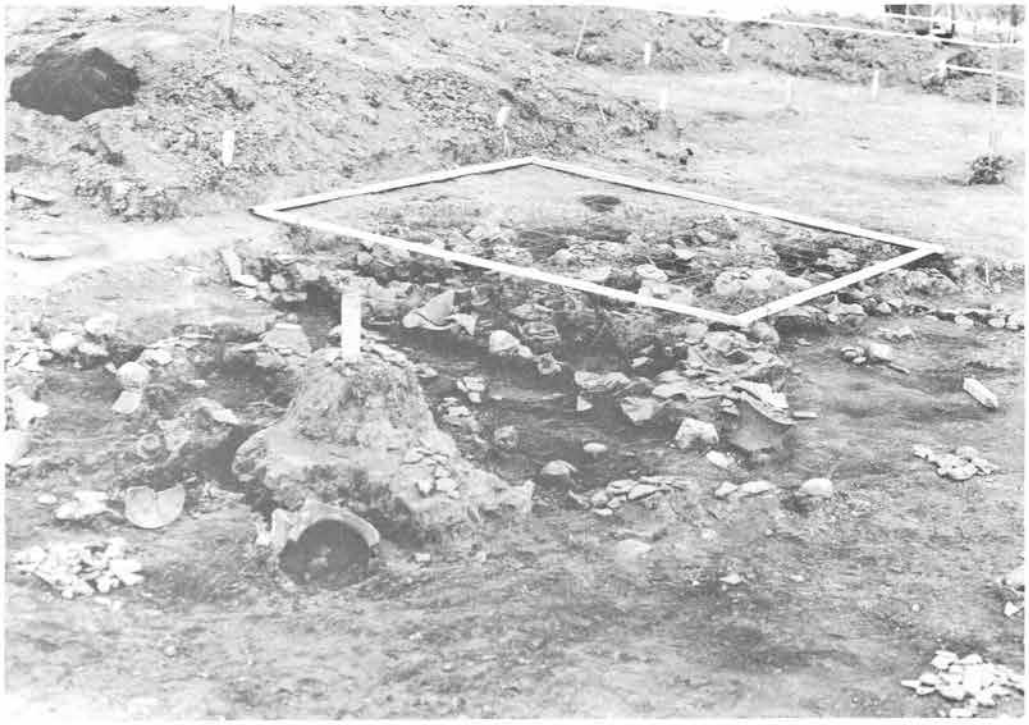


≪図版第１≫　安源寺遺跡周辺（航空写真）

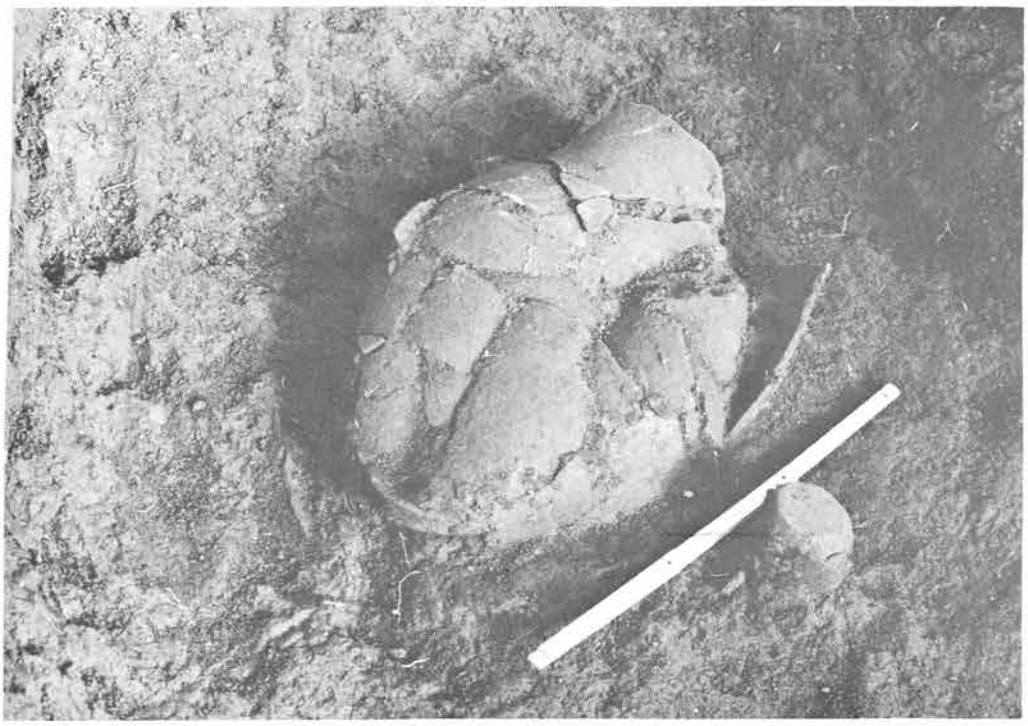
≪図版第２≫　弥生１号土坑墓発掘状況

≪図版第3　弥生1号住居址発掘状況

≪図版第4≫　弥生1号住居址



図版第5　弥生3号住居址



図版第6　甕棺出土状況

≪図版第7≫　A 区 遺 構

≪図版第8≫　古代 2 号住居 坂

≪図版第9≫　鍛冶遺構（古代3号住居址）

≪図版第10≫　遺物出土状況（弥生1号住居址）

≪図版第11≫　鍛 冶 屋　　木炭（左）　鉄滓（右）

安源寺遺跡第三次発掘調査報告書
安　源　寺

昭和54年3月20日 印刷
昭和54年3月31日 発行

著者　金　井　汲　次

発行　中野市教育委員会
長野県中野市三好町1－3－19

印刷　カナイ美術印刷
長野県中野市中央2－2－2